

看護学生との交流による 地域リーダー高齢者の活動への 満足度・心理・若者像の変化 —「異世代間交流事業」参加前・後の比較から— (Part II)

看護学生との交流による 地域リーダー—高齢者の活動への満足度・心理・若者像の変化

—「異世代間交流事業」参加前・後の比較から— (Part II)

平成22年度 山梨県立大学地域研究交流センター地域研究事業助成報告書

平成23年3月

研究代表者: 流石 ゆり子 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
共同研究者: 渡邊 裕子 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
 小山 尚美 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
 森田 祐代 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
 萩原 理恵子 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
 中澤 緑 (山梨県立大学看護学部 老年看護学)
 水口 哲 (山梨県中北教育事務所 社会教育担当)
 森本 清 (前山梨県中北教育事務所 社会教育担当)
 深沢 勝彦 (山梨県中北教育事務所 元社会教育担当)

目 次

I. 緒言（本研究の問題と目的）	1
II. 研究目的	4
III. 研究方法	4
1. 研究デザイン	
2. 調査対象	
3. 調査時期	
4. 調査方法	
5. 調査内容	
6. 実施場所及び実施時期	
7. 分析方法	
IV. 研究における倫理的配慮	6
1. 対象となる人の人権の擁護	
2. 対象となる人の理解を求め、同意を得る方法	
3. 本研究の地域貢献	
V. 結果	8
1. 対象の基本属性	
2. 活動への満足度及び社会貢献に対する意識	
3. 地域高齢者の生きがい感	
4. 地域高齢者の若者イメージ	
5. 交流事業後、若者（看護学生）に対して感じたこと	
6. 交流事業に対する意見・質問等	
IV. まとめ	23
謝辞	23
引用文献・参考文献	24
付録・資料 I	27
1. 調査協力依頼書	
2. 交流事業開始前調査票	
3. 交流事業終了後調査票	
4. 交流事業当日の写真	
付録・資料 II	41
1. 研究成果の公表	
1) 第 41 回 日本看護学会－老年看護－（奈良）研究報告	
・ 抄録	
・ 示説資料	
※ H21 年度結果	
2) 山梨県立大学看護学部 紀要 研究報告	

I. 緒言（本研究の問題と目的）

少子・高齢社会においては、家族の場以外でも高齢者と子どもをはじめとした多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくことが緊急な課題になっており¹⁾、高齢者と他世代間の交流については、各地で様々な取り組みがなされている。

高齢者と若者との交流については、主に児童から高校生までを対象とした多くの介入研究がなされ、高齢者、若者双方に対する効果が確認されている^{2)3)6)~9)}。また、看護学生を対象とした研究では、臨地実習や高齢者に対するインタビューを通じた交流と「高齢者イメージ」に関連した研究は多くある^{10)~18)}。しかし、異世代間交流、特に看護学生との交流が高齢者の「若者イメージ」に及ぼす影響や高齢者の「若者イメージ」の変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証したものはほとんどない。

Y県においても、「生涯学習の理念に立ち、人生 80 年時代の高齢者に対して、専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し、高齢者の学習ニーズに応えるとともに、高齢者の生き甲斐づくりを支援し、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的に、修業 2 年間で高齢者が学習する機会を設けている。その中のひとつに異世代間交流を目的とした『若者との交流』講座があり、本学看護学部ならびに人間福祉学部の学生と高齢者が一緒に歌やゲームを楽しんだり、高齢者がライフヒストリーを語り、また人生の先輩として学生に言葉を贈ったりするなど、相互の交流を図ってきた。この事業は平成 18 年度にスタートし、毎年 1 回池田・飯田両キャンパスにて、両学部個別のプログラムで 4 年間継続実施してきた。参加した高齢者からは「若者と話す機会がもて感銘を覚えた」「若者に対するイメージが変わった」「手応えを感じた」などの感想に加え、「将来の職業を見据え勉学に励んでいることに拍手を送りたい」や「心ならずも病に臥せておられる方々に光と希望を与えて欲しい」など、人生の先輩から専門職を目指す若者に対する貴重なメッセージをいただいている。このように、本事業は異世代間の交流事業として高い評価を得ているが、高齢者の生活に及ぼす効果についての検証は行ってこなかった。

岩佐らは³⁾、地域在宅超高齢者を対象にした訪問介護プログラム開発の予備的検討において、介入プログラムによる高齢者の若者イメージの向上が、対人交流が狭量化しがちな超高齢者において地域社会に対する関心や自発的な働きかけの維持に寄与する可能性について報告している。看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れ、若者が高齢者からの知恵の伝授を求めていることを実感できることで、高齢者が若者に感じている距離感が少なくなり、高齢者側から自発的、積極的な世代間の交流を求める姿勢が生まれてくることが期待できる。

一方、医療場面では高齢者を対象とするケア場面が益々多くなっており、高齢患者やその家族のニーズに応じた看護の提供が求められている。しかし、高齢者との接触体験が少ない現代の看護学生にとって、高齢者の理解や対応に困難を要する場合もある。また、身体的な老化や活動性の低下などのイメージが先行し、高齢者の持っている能力に気づかない

まま、養護すべき存在として捉えがちである。看護基礎教育において、学生が高齢者への関心と理解を深められるような教育を実践していくことが必要である。高齢者と直接交流する機会をもつことは、高齢者の理解を深め、ニーズに応じた看護を実践できる人材の育成に寄与するものと思われる。

我々は、昨年度、看護学生との交流が高齢者の「若者イメージ」に及ぼす影響や高齢者の「若者イメージ」の変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証するための第一歩として、地域リーダー高齢者が看護学生との交流事業開始前に抱いている若者イメージと交流に対する期待感を明らかにした。その結果、高齢者は「世間一般の今どきの20歳代の若者」イメージとして、「話しやすいが何を考えているのかが分からない」と思っている傾向があった。一方、「若者との交流」への期待度は95.8%と高く、分かり合いたい思いがあるが、自分から知恵を伝授するといった意識を持って参加した者は少なかった¹⁹⁾。

そこで今年度は、共同研究者間で4年間の本事業を評価し、交流のスタイルを上述内容での個別・集団交流から、以下のような看護学生が学内で行う演習に、高齢患者役（ボランティア）として協力を得る形に切り替えた。

【『交流事業』の経緯とH22年度事業の概要】

現代の若者は、核家族化やコミュニティの崩壊などにより、高齢者との同居経験や近隣の高齢者と交流する機会が非常に少ない。そのような背景を踏まえ、当老年看護学では、高齢者に対するステレオタイプ的なネガティブな見方を払拭し、対象を多面的に捉え、ケアすることができる能力を目指し教育を行っている。本学が開学した平成17年度末、地域研究交流センター交流支援部門あてに、Y県における高齢者のための生涯学習大学校（修業年限は2年、以下 K学院とする）から「世代を超えて話す機会がないので若者との交流をしたい」という申し出があった。K学院、本学双方の目的が一致し、翌年、平成18年度より看護学部（看護学科）・人間福祉学部（福祉コミュニティ学科）の両学部にて『若者との交流事業』として2講座の交流会を開始した。本事業は、K学院の年間スケジュールに基づき、毎年5月～6月初旬に両学部の状況を勘案し、別々の日程・場所・プログラムで実施してきた。なお、ここでは看護学部（老年看護学領域）における交流事業への取り組みについて述べる。

看護学部では、本事業を時間割上新たに組み入れることが困難であったため、事業開始後4年間は、土曜日の午前中（3時間）実施してきた。K学院生（2年生）は25名程度で、また本学部からは2年生100名の中からK学院生の人数に見合った希望者を募り交流を行ってきた。

平成18年度～平成21年度までの交流事業の概要は以下のとおりである。
本学池田キャンパスにてK学院生と看護学生が一堂に会し、相互に自己紹介を行った後、K学院生より当該世代が生まれ育った時代の懐かしのメロディの合唱とその歌にまつわ

る思い出の披露をしていただいた。その後、K学院生、看護学生ミックスの6～8人のグループ毎に自己紹介と交流を行なった。次は、看護学生とK学院生がペアになりキャンパス内の様々な場所で自由に個別交流を行い、最後に再び元の会場に集まって、全体でK学院生・学生全員が一言ずつ交流後の感想を述べ合うという展開であった。

平成22年度『交流事業』の概要は以下のとおりである。

K学院生（地域リーダー高齢者）は、看護学生が授業の一環として行う演習に、ボランティアの立場から看護の対象者役（ここでは「高齢患者」）として参加・協力する。具体的には、学生に事前に健康に関する簡単な情報を提供（本人の意思に基づく）し、当日は、看護学生4～5名のグループに高齢患者役として参加し、学生の質問や測定などに協力する。学生は対象から提供された情報について看護の視点から情報の意味や他に必要な情報などについて考える演習を行う。演習時間は約2時間とし、演習終了後に高齢者と学生が自由に意見交換のできる時間（20分程度）を設け、高齢者から人生の先輩として、専門職を目指す看護学生にアドバイスをいただくことで、高齢者と学生が相互に理解を深められるような設定とする。

6月14日（月）Ⅲ・Ⅳ限は、「老年看護実践論および老年看護技術論」の学内演習（高齢者ヘルスアセスメント）に20名、6月18日（金）Ⅰ・Ⅱ限は「ヘルスアセスメント実践論」の学内演習（成人・高齢者を対象にしたヘルスアセスメント）に18名が参加した。

【用語の操作的定義】

本研究では、「地域リーダー高齢者」「交流事業」「看護学生」を以下のように定義する。
地域リーダー高齢者；Y県が「生涯学習の理念に立ち、人生80年時代の高齢者に対して、専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し、高齢者の学習ニーズに応えとともに、高齢者の生き甲斐づくりを支援し、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的に、修業2年間で企画している高齢者のための生涯学習大学校（K学院）に在学している概ね60歳以上の高齢者をいう。

交流事業；Y県K学院の年間プログラムに基づいて実施する「若者との交流」講座をいう。

具体的には、看護学生が授業の一環として学内で行う演習にボランティアの立場から高齢患者役として参加・協力する中での学生との交流であり、演習のプロセスでの両者の交流ならびに終了後の両者の個別交流をいう。

（※【交流事業の概要】参照）

看護学生；4年制大学の看護学部看護学科の学生

Ⅱ. 研究目的

1. 学生との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足度・心理状態・若者像の変化を明らかにする。
2. 看護学生との交流が、現代の若者に対する高齢者の役割認識および社会貢献に対する意識の活性化に及ぼす効果を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

調査研究

2. 調査対象

Y県K学院2年生。年齢は概ね60歳以上（年齢はK学院の要項で定めている）。K学院の年間プログラムにて決定した6月14日（月）および6月18日（金）の「若者との交流」の講座への参加予定の高齢者（両日で延べ40名前後）

3. 調査時期

1) 交流事業前アンケート調査

平成22年6月14日（月）および6月18日（金）の『若者との交流』開始直前

2) 交流事業後アンケート調査

平成22年6月14日（月）～6月28日（月）の2週間

平成22年6月18日（金）～7月2日（金）の2週間

4. 調査方法

- 1) 交流事業前：平成22年6月14日（月）Ⅲ・Ⅳ限及び6月18日（金）Ⅰ・Ⅱ限の交流事業開始直前に、本事業の企画・運営に直接関係しない（流石・渡邊以外）共同研究者が、調査協力依頼書（資料1-1・資料1-2）と口頭で説明後、研究に同意が得られた協力者（以下 調査対象者）に、研究協力者が「交流事業開始前調査票」（資料2）を一斉配付しその場で回収する。
- 2) 交流事業後：平成22年6月14日（月）および6月18日（金）の交流事業終了直後に「交流事業終了後調査票」（資料3）と返信用封筒（切手貼付）を調査対象者に一斉配付し、2週間以内に郵送にて回収する。

5. 調査内容

1) 基本属性（交流事業前のみ）

年齢，性，家族構成，若者との接触頻度

2) 活動への満足度及び社会貢献に対する意識

事業前；交流事業への参加動機 1 項目，本活動への期待 2 項目，社会貢献に対する意識 8 項目

事業後；活動後の満足度 3 項目，社会貢献に対する意識 8 項目

3) 心理（事業前・後）

近藤・鎌田の「生きがい感スケール⁴⁾」を用いて，その中から重複した内容を除き，選択肢を 5 段階とした 16 項目

4) 若者像（事業前・後）

甲斐らの「若者イメージ尺度⁵⁾」参考にした若者イメージ 8 項目

5) 感想・要望・質問（事業前・後） 自由記載

6) 看護学生に対して感じたこと（事業後のみ） 自由記載

6. 実施場所および実施時期

1) 場所：Y 県立大学 池田キャンパス 実習室

2) 時期： 6 月 14 日（月）Ⅳ・Ⅴ限

6 月 18 日（金）Ⅰ・Ⅱ限

* 「若者との交流」は K 学院の年間計画に基づき、上記日程に予定されている。

7. 分析方法

1) 各調査内容の群間差については、t 検定、Mann-Whitney 検定により、各調査内容の前後の変化については、 χ^2 検定、対応のある t 検定、Wilcoxon 検定により検討した。すべての解析は、SPSS16.0J for Windows を用いて行なった。

2) 調査票の自由記載部分については、質的に分析した。

IV. 研究における倫理的配慮

1. 対象となる人の人権の擁護

「ヘルシンキ宣言」および「看護師の倫理規定（日本看護協会）」等に従って以下の点を遵守した。

- ・人々の知る権利及び自己決定の権利を尊重し、その権利を擁護する。
- ・守秘義務を遵守し、個人情報の保護に努めるとともに、これを他者と共有する場合は適切な判断のもとに行う。

2. 対象となる人の理解を求め、同意を得る方法

対象となる人に対して、本研究の目的及び調査内容と調査方法について記載した文書（資料1）および調査票を用いて、交流事業の企画・運営に直接関わる流石・渡邊以外の共同研究者が口頭で十分な説明を行うと共に、調査票の冒頭には「協力する」「協力しない」の選択肢を付し、対象者の自由意思を尊重する。本研究への参加は強制ではないこと、研究途上であっても同意は撤回できること、本研究への協力を拒否しても不利益は一切生じないこと、前・後比較のため調査票には番号を付け交流事業前・後で同一番号の調査票に記入してもらうが、本研究で取得されたデータは研究目的を踏まえ匿名性を確保した分析と公表、研究終了後の確実な破棄等について参加者に十分な説明を行った。

なお研究者が交流事業担当者であるため、対象となる人に強制力が働く可能性がある。従って、依頼を断れない状況を生み出さないように、上記の趣旨および注意事項等の説明と同意の確認は、本事業の企画・運営に直接関係しない共同研究者が行った。

なお本研究は、本学看護学部研究倫理審査委員会の倫理審査にて『承認』を得ている。

3. 本研究の地域貢献

Y県も例外ではなく、高齢化率が23.6%（平成21年4月1日現在）と超高齢社会を目前にしており、多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくという緊急課題を抱えている。

既述のように、「異世代間交流」の必要性が叫ばれ、各地で様々な取り組みが開始されている。本事業の4年間の継続により、K学院生ならびに本学学生の双方に抱くイメージはプラスに変化したのみならず、高い満足感が得られている。しかしこのような事業は、具体的なプログラムを社会が提供しないとその実現はまだ難しい状況にある。交流プログラムの提供により、高齢者が若者と公然と交流ができる本事業は、高齢者からこの上ない喜びの機会であるとの声も多く、交流の成果は極めて大きいといえる。我々は、4年間の継続実施を契機に本事業を評価し、今年度よりK学院生は、専門職をめざす看護学生の教育の一部に「高齢患者役」として関わ

る形で交流を図るというプログラムに改変した。この取り組みは、生活自立度の高いいわゆる“健康な高齢者”が若者に知恵を伝授する機会としての意義は大きく、本事業を通し高齢者の生きがい形成やQOLの向上にもつながるものと思われる。さらに、地域に開かれた大学として、本学の教育内容を地域住民に知っていただく機会としても意義があるといえる。本交流事業の実施主体である中北教育事務所の担当者（3名）にも、昨年度より共同研究者としてお入りいただいている。このことにより、地域の社会教育機関と共同で本事業を実施・評価し、その成果を広く社会に発信することが可能となった。本事業を担当する中北教育事務所のスタッフ（教育職）は、皆、近い将来小中学校の管理職として学校に戻られる人たちである。このように、初等教育においても、児童・生徒の高齢者観の形成やエイジズム払拭の道が開かれたことの意義は大きく、この点からも大学の社会貢献は評価できると考える。

V. 結果

1. 対象の基本属性

1) 基本属性

対象者 38 名全員から回答が得られた（回収率：100%）。対象者の平均年齢±SD は、68.1 ± 3.4 歳で、範囲は 62 歳から 76 歳であった。各年代別の構成は、60～64 歳が 5 名（13.2%）、65～69 歳代が 19 名（50.0%）、70～74 歳が 13 名（34.2%）、75 歳以上が 1 名（2.6%）であった。対象者の性別は、男性 13 名（34.2%）、女性 25 名（65.8%）であった（表 1）。

表1 対象者の基本属性

n=38			
		人数	割合
年齢	60～64歳	5	13.2%
	65～69歳	19	50.0%
	70～74歳	13	34.2%
	75歳以上	1	2.6%
性別	男性	13	34.2%
	女性	25	65.8%

2) 同居家族

同居家族について複数回答で聞いたところ、配偶者がいる者が 27 名（71.1%）であり、息子が 8 名（21.1%）、娘が 5 名（13.2%）、嫁が 4 名（10.5%）、孫が 3 名（7.9%）、義母が 2 名（5.3%）であり、母、婿がそれぞれ 1 名（2.6%）であった（表 2）。なお、独居の者は 4 名（10.5%）であった。

表2 対象者の同居家族

複数回答		
	人数	割合
配偶者	27	71.1%
息子	8	21.1%
娘	5	13.2%
嫁	4	10.5%
孫	3	7.9%
義母	2	5.3%
母	1	2.6%
婿	1	2.6%

3) 若者との接触頻度と内訳

若者との接触頻度は「ある」と回答したものが 9 名（23.7%）、「ときどきある」が 12 名（31.6%）であり、「ほとんどない」は 16 名（42.1%）であった（表 3）。このうち、「ある」「ときどきある」と回答した 21 名に、誰と接触するのか質問したところ、「近所の若者」が 6 名（28.6%）、「別居の孫」が 4 名（19.0%）、「同居の孫」が 1 名（4.8%）であり、「その他」が 6 名（28.6%）であった。「その他」には、アパートの子供、各種団体、勤務先、趣味、息子・娘夫婦、友人の子供などがあった。

表3 若者との接触頻度

n=38		
	人数	割合
ある	9	23.7%
ときどきある	12	31.6%
ほとんどない	16	42.1%
無効回答	1	2.6%

また、接触する頻度について質問したところ、「週 1 回程度」が 9 名（42.9%）、「月 1 回程度」が 5 名（23.8%）、「毎日」

表4 若者との接触の内訳

(表3で「ある」「ときどきある」と回答した21人に質問) n=21			
		人数	割合
誰と	近所の若者	6	28.6%
	別居の孫	4	19.0%
	同居の孫	1	4.8%
	その他	6	28.6%
	無回答・無効回答	4	19.0%
頻度	週1回程度	9	42.9%
	月1回程度	5	23.8%
	毎日	1	4.8%
	その他	4	19.0%
	無回答・無効回答	2	9.5%
時間	30分以内	10	47.6%
	挨拶程度	5	23.8%
	60分以内	1	4.8%
	1時間以上	3	14.3%
	無回答・無効回答	2	9.5%

が1名(4.8%)、「その他」が4名(19.0%)であった。「その他」には、顔が合った時、週3回程度、2・3ヶ月に1回、年に2回程度などがあった。

さらに、接触する時間について質問したところ、「30分以内」が10名(47.6%)、「挨拶程度」が5名(23.8%)、「60分以内」が1名(4.8%)、「1時間以上」が3名(14.3%)であった(表4)。

4)「若者との交流事業(以下、交流事業)」への参加動機

交流事業の参加動機について複数回答で質問したところ、「看護学生の学びに興味があったから」「K学院の年間計画にあったので」がともに16名(42.1%)で、「若者と話す機会が少ないから」が9名(23.7%)、「若者と話すことが好きだから」が6名(15.8%)、「参加経験者の話を聞いて面白そうだから」が4名(10.5%)、「若者に年長者としての知恵を伝授したいから」が2名

(5.3%)、「その他」が3名(7.9%)であった(表5)。「その他」には、「勉強になると思い参加した」「若者の育成」「自分の健康管理に参考になる」などがあった。

表5 参加動機

	人数	複数回答
		割合
看護学生の学びに興味があったから	16	42.1%
K学院の年間計画にあったので	16	42.1%
若者と話す機会が少ないから	9	23.7%
若者と話すことが好きだから	6	15.8%
参加経験者の話を聞いて面白そうだから	4	10.5%
若者に年長者としての知恵を伝授したいから	2	5.3%
その他	3	7.9%

2. 活動への満足度及び社会貢献に対する意識

1) 交流事業前の本事業への期待度とその内容

本事業への期待度を質問したところ、「とても期待している」が9名(23.7%)、「期待している」が28名(73.7%)であり、「あまり期待していない」「まったく期待していない」は0名(0.0%)であった(表6)。

表6 事業に対する期待度

	人数	n=38 割合
とても期待している	9	23.7%
期待している	28	73.7%
あまり期待していない	0	0.0%
まったく期待していない	0	0.0%
無回答	1	2.6%

期待する内容を複数回答で質問したところ、「現代の看護学生を理解したい」が20名(52.6%)、「看護学生のことをたくさん聞きたい」が18名(47.4%)、「看護学生の学びをサポート(手助け)したい」が15名(39.5%)、「看護学生に自分たちの世代

を理解してほしい」が11名(28.9%)、「自分が看護学生にたくさん話をしたい」が6名(15.8%)であった。「その他」は1名(2.6%)で、「看護

表7 事業に期待する内容

	人数	複数回答 割合
現代の看護学生を理解したい	20	52.6%
看護学生のことをたくさん聞きたい	18	47.4%
看護学生の学びをサポート(手助け)したい	15	39.5%
看護学生に自分たちの世代を理解してほしい	11	28.9%
自分が看護学生にたくさん話をしたい	6	15.8%
その他	1	2.6%

看護学生の将来を期待する一環として」との意見があった(表7)。

2) 交流事業後の本事業に対する満足度

本事業参加後の満足度を質問したところ、「期待以上の満足度であった」が 23 名 (60.5%)、「期待していたとおりの満足度であった」が 13 名 (34.2%)、「期待していたより満足度は低かった」が 1 名 (2.6%) であり、「まったく満足できなかった」と回答した者はいなかった。

交流した若者（看護学生）は真剣に話を聞いていたかどうかについての質問は、「とてもよく聞いていた」が 37 名 (97.4%)、「まあまあ聞いていた」が 1 名 (2.6%) で、「どちらとも言えない」「あまり聞いていなかった」「全く聞いていなかった」と回答した者はいなかった。

さらに、自分の話が若者（看護学生）に十分理解されたと思うか質問したところ、「とてもよく理解されていたと思う」が 13 名 (34.2%)、「まあまあ理解されていたと思う」が 25 名 (65.8%) であり、「どちらとも言えない」「あまり理解されていなかったと思う」「全く理解されなかったと思う」と回答したものはなかった（表 8）。

表8 事業後の若者との交流事業に対する満足度

		n=38	
		人数	割合
事業後の満足度			
期待以上の満足度であった		23	60.5%
期待していたとおりの満足度であった		13	34.2%
期待していたより満足度は低かった		1	2.6%
まったく満足できなかった		0	0.0%
無回答		1	2.6%
若者は真剣に話を聞いていたか			
とてもよく聞いていた		37	97.4%
まあまあ聞いていた		1	2.6%
どちらとも言えない		0	0.0%
あまり聞いていなかった		0	0.0%
全く聞いていなかった		0	0.0%
自分の話は若者に十分理解されたと思うか			
とてもよく理解されていたと思う		13	34.2%
まあまあ理解されていたと思う		25	65.8%
どちらともいえない		0	0.0%
あまり理解されていなかったと思う		0	0.0%
全く理解されなかったと思う		0	0.0%

3) 交流事業前・後の期待度・満足度の比較

交流事業への期待度を、事業前後で比較したところ (χ^2 検定)、有意な差が見られた ($p=0.0018$)。

表9 事業前後の期待度・満足の比較

		n=38	
		事業前	事業後
とても期待している	期待以上の満足度であった	9	23
期待している	期待していたとおりの満足度であった	28	13
あまり期待していない	期待していたより満足度は低かった	0	1
まったく期待していない	まったく満足できなかった	0	0
無回答		1	1

χ^2 検定, $p=0.0018$

4) 交流事業前の地域行事・活動への参加頻度

現在、地域行事への参加をどの程度しているか質問したところ、「いつもしている」が 11 名 (28.9%)、「ときどきしている」が 20 名 (52.6%)、「していない」が 6 名 (15.8%) であった。同様に、町内会や自治会活動への参加については、「いつもしている」が 21 名 (55.3%)、「ときどきしている」が 12 名 (31.6%)、「していない」が 5 名 (13.2%) であった。老人クラブ活動への参加では、「いつもしている」が 7 名 (18.4%)、「ときどきしている」が 5 名 (13.2%)、「していない」が 25 名 (65.8%) であり、趣味の活動への参加では、「いつもしている」が 30 名 (78.9%)、「ときどきしている」が 8 名

(21.1%)であり、「していない」とした者はいなかった。奉仕活動・ボランティアへの参加では、「いつもしている」が11名(28.9%)、「ときどきしている」が20名(52.6%)、「していない」が7名(18.4%)であった(表10)。

5) 交流事業後の地域行事・活動への参加頻度

事業後に、地域行事への参加を今後の程度しようと思うか質問したところ、「いつも参加する」が17名(44.7%)、「ときどき参加する」が18名(47.4%)、「参加しない」が3名(7.9%)であった。同様に、町内会や自治会活動への参加について質問したところ、「いつも参加する」が22名(57.9%)、「ときどき参加する」が15名(39.5%)、「参加しない」が1名(2.6%)であり、老人クラブ活動では、「いつも参加する」が8名(21.1%)、「ときどき

参加する」が14名(36.8%)、「参加しない」が15名(39.5%)であった。趣味の活動への参加では、「いつも参加する」が31名(81.6%)、「ときどき参加する」が6名(15.8%)であり、「参加しない」とした者はいなかった。奉仕活動・ボランティア活動への参加では、「いつも参加する」が13名(34.2%)、「ときどき参加する」が21名(55.3%)、「参加しない」が4名(10.5%)であった。

さらに、小学生に自分の経験を話すような活動依頼が今後あった場合、引き受けるかどうか質問したところ、「引き受ける」が10名(26.3%)、「どちらとも言えない」が26名(68.4%)、「引き受けない」が2名(5.3%)であった。同様に、看護学生に自分の経験を話す依頼については、「引き受ける」が12名(31.6%)、「どちらとも言えない」が21名(55.3%)、「引き受けない」が5名(13.2%)であり、看護学生の血圧・脈拍測定に協力する依頼については、「引き受ける」が34名(89.5%)、「どちらとも言えない」が3名(7.9%)、「引き受けない」が1名(2.6%)であった(表10)。

表10 事業前・後の社会貢献に対する意識

	事業前		事業後	
	人数	割合	人数	割合
地域行事への参加				
いつもしている	11	28.9%	17	44.7%
ときどきしている	20	52.6%	18	47.4%
していない	6	15.8%	3	7.9%
無回答	1	2.6%		
町内会や自治会活動への参加				
いつもしている	21	55.3%	22	57.9%
ときどきしている	12	31.6%	15	39.5%
していない	5	13.2%	1	2.6%
老人クラブ活動への参加				
いつもしている	7	18.4%	8	21.1%
ときどきしている	5	13.2%	14	36.8%
していない	25	65.8%	15	39.5%
無回答	1	2.6%	1	2.6%
趣味の活動への参加				
いつもしている	30	78.9%	31	81.6%
ときどきしている	8	21.1%	6	15.8%
していない	0	0.0%	0	0.0%
無回答	0	0.0%	1	2.6%
奉仕活動・ボランティアへの参加				
いつもしている	11	28.9%	13	34.2%
ときどきしている	20	52.6%	21	55.3%
していない	7	18.4%	4	10.5%
小学生に自分の経験を話す				
引き受ける			10	26.3%
どちらとも言えない			26	68.4%
引き受けない			2	5.3%
看護学生に自分の経験を話す				
引き受ける			12	31.6%
どちらとも言えない			21	55.3%
引き受けない			5	13.2%
看護学生の血圧・脈拍測定に協力する				
引き受ける			34	89.5%
どちらとも言えない			3	7.9%
引き受けない			1	2.6%

6) 交流事業前・後の地域行事・活動への参加頻度の比較

地域行事・活動への参加に対する意識を、交流事業前後で比較したところ(χ^2 検定)、有意な差はみられなかった。

3. 地域高齢者の生きがい感

1) 交流事業前の生きがい感

生きがい感の信頼係数は、16 項目全体で 0.907 であった。下位尺度ごとに見ると、現状満足 (4 項目) が 0.851、人生享楽 (4 項目) が 0.704、存在価値 (3 項目) が 0.526、意欲 (5 項目) が 0.829 であった (表 11)。生きがい感の平均値±標準偏差は 61.53±8.28 であり、範囲は 45～77 であった。

表11 生きがい感スケールの信頼係数

	項目数	α 係数
全体	16	0.907
下位尺度		
現状満足	4	0.851
人生享楽	4	0.704
存在価値	3	0.526
意欲	5	0.829

事業前の生きがい感を接触頻度、性別、年代で比較したところ、いずれも有意な差はみられなかった。

2) 交流事業後の生きがい感

事業後の生きがい感の平均値±標準偏差は、61.10±8.87 であり、範囲は 33～74 であった。事業後の生きがい感を性別で比較したところ、男性が 57.92±10.26、女性が 64.29±7.25 であり、女性の方が生きがい感は有意に高かった

表12 事業後の生きがい感 性別による比較

	人数	平均値	標準偏差
男性	12	57.92	10.26
女性	21	64.29	7.25

t検定, p=0.045

(p=0.045) (表 12)。接触頻度で比較したところ、有意な差は見られなかった。年代で比較したところ、有意な差は見られなかった。

3) 交流事業前・後の生きがい感の比較

事業前と事業後の生きがい感を比較したところ、有意な差は見られなかった。

4. 地域高齢者の若者イメージ

1) 交流事業前の若者イメージ

事業前に若者イメージ 8 項目について質問したところ、「20 歳代の若者は社会に貢献している」に対しては、「非常にそう思う」が、2 名 (5.3%)、「ややそう思う」が 11 名 (28.9%)、「どちらとも言えない」が 13 名 (34.2%)、「あまりそう思わない」が 11 名 (28.9%) であり、「まったくそう思わないが」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」では、「非常にそう思う」が、6 名 (15.8%)、「ややそう思う」が 19 名 (50.0%)、「どちらとも言えない」が 5 名 (13.2%)、「あまりそう思わない」が 6 名 (15.8%)、「まったくそう思わない」が 1 名 (2.6%) であっ

た。「20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる」では、「非常にそう思う」が、16名(42.1%)、「ややそう思う」が12名(31.6%)、「どちらとも言えない」が7名(18.4%)、「あまりそう思わない」が2名(5.3%)であり、「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、何を考えているのかわからない」では、「ややそう思う」が16名(42.1%)、「どちらとも言えない」が20名(52.6%)であり、「非常にそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、話しやすい」では、「非常にそう思う」が、3名(7.9%)、「ややそう思う」が8名(21.1%)、「どちらとも言えない」が18名(47.4%)、「あまりそう思わない」が8名(21.1%)であり、「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、きちんとしている」では、「ややそう思う」が4名(10.5%)、「どちらとも言えない」が29名(76.3%)、「あまりそう思わない」が4名(10.5%)であり、「非常にそう思う」「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、あたたかい」では、「ややそう思う」が9名(23.7%)、「どちらとも言えない」が24名(63.2%)、「あまりそう思わない」が4名(10.5%)であり、「非常にそう思う」「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、強い」では、「非常にそう思う」が1名(2.6%)、「ややそう思う」が4名(10.5%)、「どちらとも言えない」が20名(52.6%)、「あまりそう思わない」が11名(28.9%)、「まったくそう思わない」は1名(2.6%)であった(表13)。

表13 事業前・後の若者イメージ

若者像①「20歳代の若者は、社会に貢献している」					若者像⑤「20歳代の若者は、話しやすい」				
		人数		割合			人数		割合
		事業前	事業後	事業前 事業後			事業前	事業後	事業前 事業後
非常にそう思う	2	5	5.3%	13.2%	非常にそう思う	3	5	7.9%	13.2%
ややそう思う	11	12	28.9%	31.6%	ややそう思う	8	16	21.1%	42.1%
どちらとも言えない	13	17	34.2%	44.7%	どちらとも言えない	18	13	47.4%	34.2%
あまりそう思わない	11	4	28.9%	10.5%	あまりそう思わない	8	4	21.1%	10.5%
まったくそう思わない	0	0	0.0%	0.0%	まったくそう思わない	0	0	0.0%	0.0%
無回答	1	0	2.6%	0.0%	無回答	1	0	2.6%	0.0%
p=0.006					p=0.048				
若者像②「20歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」					若者像⑥「20歳代の若者は、きちんとしている」				
		人数		割合			人数		割合
		事業前	事業後	事業前 事業後			事業前	事業後	事業前 事業後
非常にそう思う	6	4	15.8%	10.5%	非常にそう思う	0	4	0.0%	10.5%
ややそう思う	19	22	50.0%	57.9%	ややそう思う	4	19	10.5%	50.0%
どちらとも言えない	5	7	13.2%	18.4%	どちらとも言えない	29	11	76.3%	28.9%
あまりそう思わない	6	5	15.8%	13.2%	あまりそう思わない	4	3	10.5%	7.9%
まったくそう思わない	1	0	2.6%	0.0%	まったくそう思わない	0	1	0.0%	2.6%
無回答	1	0	2.6%	0.0%	無回答	1	0	2.6%	0.0%
p=0.000					p=0.000				
若者像③「20歳代の若者は、これからの活躍が期待できる」					若者像⑦「20歳代の若者は、あたたかい」				
		人数		割合			人数		割合
		事業前	事業後	事業前 事業後			事業前	事業後	事業前 事業後
非常にそう思う	16	19	42.1%	50.0%	非常にそう思う	0	4	0.0%	10.5%
ややそう思う	12	15	31.6%	39.5%	ややそう思う	9	19	23.7%	50.0%
どちらとも言えない	7	3	18.4%	7.9%	どちらとも言えない	24	10	63.2%	26.3%
あまりそう思わない	2	1	5.3%	2.6%	あまりそう思わない	4	3	10.5%	7.9%
まったくそう思わない	0	0	0.0%	0.0%	まったくそう思わない	0	1	0.0%	2.6%
無回答	1	0	2.6%	0.0%	無回答	1	1	2.6%	2.6%
p=0.032					p=0.004				
若者像④「20歳代の若者は、何を考えているのかわからない」					若者像⑧「20歳代の若者は、強い」				
		人数		割合			人数		割合
		事業前	事業後	事業前 事業後			事業前	事業後	事業前 事業後
非常にそう思う	0	0	0.0%	0.0%	非常にそう思う	1	0	2.6%	0.0%
ややそう思う	16	13	42.1%	34.2%	ややそう思う	4	14	10.5%	36.8%
どちらとも言えない	20	16	52.6%	42.1%	どちらとも言えない	20	19	52.6%	50.0%
あまりそう思わない	0	7	0.0%	18.4%	あまりそう思わない	11	2	28.9%	5.3%
まったくそう思わない	0	2	0.0%	5.3%	まったくそう思わない	1	3	2.6%	7.9%
無回答	2	0	5.3%	0.0%	無回答	1	0	2.6%	0.0%
p=0.010									

事業前の若者イメージを接触頻度別に

比較したところ、「20歳代の若者は、社会に貢献している」(p=0.026)、「20歳代の若者は、強い」(p=0.035)で有意な差がみられた(表14)。性別で比較すると、

「20歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」(p=0.049)で有意な差がみられた(表15)。年代別の比較では、「20歳代の若者は、強い」(p=0.028)で有意な差がみられた(表16)。

表14 事業前の若者イメージの接触頻度による比較

n=38

	人数		割合		
	「ある」「ときどきある」	「ほとんどない」	「ある」「ときどきある」	「ほとんどない」	
「20歳代の若者は社会に貢献している」					
非常にそう思う	1	1	4.8%	6.3%	p=0.026
ややそう思う	9	2	42.9%	12.5%	
どちらともいえない	8	5	38.1%	31.3%	
あまりそう思わない	3	8	14.3%	50.0%	
全くそう思わない	0	0	0.0%	0.0%	
無回答		1			
「20歳代の若者は、強い」					
非常にそう思う	0	1	0.0%	0.0%	p=0.035
ややそう思う	4	0	19.0%	0.0%	
どちらともいえない	13	7	61.9%	43.8%	
あまりそう思わない	4	7	19.0%	43.8%	
全くそう思わない	0	1	0.0%	6.3%	
無回答		1			

Mann-Whitney検定

Mann-Whitney検定

表15 事業前の若者イメージの性別による比較

					n=38
	人数		割合		
	男性	女性	男性	女性	
「20歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」					
非常にそう思う	3	3	25.0%	12.0%	p=0.049
ややそう思う	8	11	66.7%	44.0%	
どちらともいえない	0	5	0.0%	20.0%	
あまりそう思わない	1	5	8.3%	20.0%	
全くそう思わない	0	1	0.0%	4.0%	
無回答	1				

Mann-Whitney検定

表16 事業前の若者イメージの年代による比較

					n=38
	人数		割合		
	60歳代	70歳代	60歳代	70歳代	
「20歳代の若者は、強い」					
非常にそう思う	0	1	0.0%	7.7%	p=0.028
ややそう思う	2	2	8.3%	15.4%	
どちらともいえない	11	9	45.8%	69.2%	
あまりそう思わない	10	1	41.7%	7.7%	
全くそう思わない	1	0	4.2%	0.0%	
無回答		1			

Mann-Whitney検定

2) 交流事業後の若者イメージ

事業後に若者イメージ8項目について質問したところ、「20歳代の若者は社会に貢献している」に対しては、「非常にそう思う」が、5名(13.2%)、「ややそう思う」が12名(31.6%)、「どちらとも言えない」が17名(44.7%)、「あまりそう思わない」が4名(10.5%)であり、「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている」では、「非常にそう思う」が、4名(10.5%)、「ややそう思う」が22名(57.9%)、「どちらとも言えない」が7名(18.4%)、「あまりそう思わない」が5名(13.2%)、「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20歳代の若者は、これからの活躍が期待できる」では、「非常にそう思う」が、19名(50.0%)、「ややそう思う」が15名(39.5%)、「どちらとも言えない」が3名(7.9%)、「あまりそう思わない」が1名(2.6%)であり、「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20歳代の若者は、何を考えているのかわからない」では、「ややそう思う」が13名(34.2%)、「どちらとも言えない」が16名(42.1%)、「あまりそう思わない」が7名(18.4%)、「まったくそう思わない」が2名(5.3%)

であり、「非常にそう思う」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、話しやすい」では、「非常にそう思う」が 5 名 (13.2%)、「ややそう思う」が 16 名 (42.1%)、「どちらとも言えない」が 13 名 (34.2%)、「あまりそう思わない」が 4 名 (10.5%)であり、「まったくそう思わない」と回答した者はいなかった。「20 歳代の若者は、きちんとしている」では、「非常にそう思う」が 4 名 (10.5%)、「ややそう思う」が 19 名 (50.0%)、「どちらとも言えない」が 10 名 (26.3%)、「あまりそう思わない」が 3 名 (7.9%)、「まったくそう思わない」が 1 名 (2.6%) であった。「20 歳代の若者は、あたたかい」では、「非常にそう思う」が 4 名 (10.5%)、「ややそう思う」が 19 名 (50.0%)、「どちらとも言えない」が 11 名 (28.9%)、「あまりそう思わない」が 3 名 (7.9%)、「まったくそう思わない」が 1 名 (2.6%) であった。「20 歳代の若者は、強い」では、「ややそう思う」が 14 名 (36.8%)、「どちらとも言えない」が 19 名 (50.0%)、「あまりそう思わない」が 2 名 (5.3%)、「まったくそう思わない」は 3 名 (7.9%) であり、「非常にそう思う」と回答した者はいなかった (表 13)。

事業後の若者イメージを接触頻度別に比較したところ、どの項目でも有意な差は見られなかった。性別で比較すると、「20 歳代の若者は、何を考えているのかわからない」(p=0.010)、「20 歳代の若者は、あたたかい」(p=0.012) で有意な差が

表17 事業後の若者イメージの性別による比較

	人数		割合		n=38
	男性	女性	男性	女性	
「20歳代の若者は、何を考えているのかわからない」					
非常にそう思う	0	0	0.0%	0.0%	p=0.010
ややそう思う	8	5	66.7%	20.0%	
どちらともいえない	4	12	33.3%	48.0%	
あまりそう思わない	1	6	8.3%	24.0%	
全くそう思わない	0	2	0.0%	8.0%	
「20歳代の若者は、あたたかい」					
非常にそう思う	0	4	0.0%	16.0%	p=0.012
ややそう思う	5	14	41.7%	56.0%	
どちらともいえない	5	5	41.7%	20.0%	
あまりそう思わない	2	1	16.7%	4.0%	
全くそう思わない	1	0	8.3%	0.0%	
無回答		1			

Mann-Whitney検定

Mann-Whitney検定

表18 事業後の若者イメージの年代による比較

					n=38
	人数		割合		
	60歳代	70歳代	60歳代	70歳代	
「20歳代の若者は、何を考えているのかわからない」					
非常にそう思う	0	0	0.0%	0.0%	
ややそう思う	5	8	20.8%	61.5%	
どちらともいえない	11	5	45.8%	38.5%	
あまりそう思わない	7	0	29.2%	0.0%	
全くそう思わない	1	1	4.2%	7.7%	p=0.020
「20歳代の若者は、きちんとしている」					
非常にそう思う	4	0	16.7%	0.0%	
ややそう思う	15	4	62.5%	30.8%	
どちらともいえない	4	7	16.7%	53.8%	
あまりそう思わない	1	2	4.2%	15.4%	
全くそう思わない	0	1	0.0%	7.7%	p=0.002

Mann-Whitney検定

差がみられた (表 18)。

3) 交流事業前・後の若者イメージの比較

事業前と事業後の若者イメージを比較すると、「20 歳代の若者は、社会に貢献している」($p=0.006$)、「20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる」($p=0.032$)、「20 歳代の若者は、何を考えてるのかわからない」($p=0.010$)、「20 歳代の若者は、話しやすい」($p=0.048$)、「20 歳代の若者はきちんとしている」($p=0.000$)、「20 歳代の若者はあたたかい」($p=0.004$) で有意な差がみられた (Wilcoxon 検定)。(表 13)

5. 交流後、若者（看護学生）に対して感じたこと

事業後に「若者に対して感じたこと」を自由記載で質問した。得られたデータを内容が一文一義であるよう記述を区切り 1 記録単位とし、さらに内容の類似性により帰納的に分類した。その結果、『看護学生の特徴』『看護職としての将来への希望と期待』『目標達成への前向きな姿勢に感心』の 3 つの最終的なカテゴリーを得た。以下、『』を最終的なカテゴリー、「」を第 2 段階のカテゴリー、() 内は記録単位数を示す。

『看護学生の特徴 (44)』は、「高齢者が感じた学生の特徴 (28)」「学生のコミュニケーション技術の特徴 (10)」「外見から捉えた学生の特徴 (6)」の 3 つのカテゴリーから構成されていた。同様に、『看護職としての将来への希望と期待 (30)』は「高齢者が望む学生の将来像 (17)」「看護学生の将来に希望を感じた (12)」「将来に期待する (1)」の 3 つのカテゴリーから、『目標達成への前向きな姿勢に感心 (17)』は「目標達成への前向きな取り組み姿勢 (14)」「目的に向かい戸力する姿に感心 (3)」の 2 つのカテゴリーから構成されていた。結果の詳細は表 19 に示す通りである。

表19 若者(看護学生)に対して感じたこと

最終的な カテゴリー	第2段階の カテゴリー	第1段階のカテゴリー	記録単位
看護学生 の特徴 (44)	高齢者が感じた 学生の特徴 (28)	感じが良い (5)	感じが良い
			とても感じの良い若者
			好感もてる学生
			気持ちよく接することができた
			素敵ないい学生
		良い教育を受けている(3)	受け答えが良く、両親や教員の教育の賜物であると感じた
			学生生活で向上心や協調性を学んでいる
			膝がよくされている
		若者の一般的な印象と比較すると 看護学生は〇〇だ (3)	テレビ等で若者が繁華街にたむろしている場面を見るにつけ、学生達に心洗われる気がした
			現在の若者は自己主義が強く、他人の事など関心が少ないと思っていたが、心の優しい方が多いと感じた
			テレビ・ラジオなどの若者はとても元気に話すので、学生の物静かな対応に驚いた
		学生の若さに感動 (3)	いきいきとしていてうらやましい
			若いっていいなと感じた
			50年前の自分を思い出して若いっていいなと感じた
		将来の看護師像に期待(2)	将来すばらしい看護師になるだろう
			看護学生として将来を見据えているせいか、しっかりと対応が出来、将来優秀なスタッフになれる
		真面目(2)	真面目
			本当に真面目
		素直(1)	素直
		輝きの目、姿勢(常にメモをしていました)、年齢の 違い(時代の違い)に信じ難き一面があった(1)	輝きの目、姿勢(常にメモをしていました)、年齢の違い(時代の違い)に信じ難き一面があった
		頼もしい(1)	頼もしい
		真剣(1)	真剣
		優しさを備えた学生(1)	優しさを備えた学生
		家庭に恵まれた学生(1)	家庭に恵まれた学生
		意欲的(1)	意欲的
		自信を積み重ねている(1)	自信を積み重ねている
		礼儀正しい(1)	礼儀正しい
		どんな考え方をしているのか解らない(1)	どんな考え方をしているのか解らない
	学生の コミュニケーション 技術の特徴 (10)	傾聴する姿勢 (5)	一生懸命話を聞いてくれた
			話を良く聞き質問にも良く答えてくれた
			話をよく聞く
			小さな痛み、当たり前の痛みを一生懸命に聞き、アドバイスしてくれた
			話を真剣に聞いてくれた
		安心して話せる表情 (4)	とても優しい目をしていて癒された
			学生の笑顔が私の不安をとりのぞいてくれた
			若者と話をする機会がほとんどないため、始めは戸惑ったがお互いの笑顔が出てきてかわいいと感じた
			対人関係で常に明るく笑みを絶やさない心がけがある
			学生の質問事項が重点となり、我々老人の話が中断してしまう為、色々な話題の中から質問がスムーズにできるよう話術を会得してほしい(1)
	外見から捉えた 学生の特徴 (6)	明るい(2)	明るい
			明るい
		孫のような若者(1)	孫のような若者
		笑顔が素敵(1)	笑顔が素敵
		元気(1)	元気
		派手でなく清潔感がある(1)	派手でなく清潔感がある

最終的な カテゴリー	第2段階の カテゴリー	第1段階のカテゴリー	記録単位
看護職としての将来への希望と期待 (30)	高齢者が望む 学生の将来像 (17)	高齢者が望む看護師像 (7)	仕事となると多忙やストレスや責任から学生の時のように患者に関われないが、今日のように明るく笑顔で声をかけ話を聞いてあげて欲しい
			つらい仕事だが負けずに頑張り立派になって欲しい
			資格をとり社会や自分のために頑張って欲しい
			笑顔を忘れずにいて欲しい
			自分が受けたい看護を提供して欲しい
			大変だが大切な仕事、将来立派な看護師になって欲しい
			様々なタイプの人と対応ができ、どんな人にも好まれるいい看護師になって欲しい
		高齢者が望む将来の生き方 (6)	専門分野の勉強と共に精神的にも成熟した人間性が求められる職業である為、政治、経済、時事にも興味を持ち、心広い常識のある人になって欲しい
			世の為人の為と言いたいところだが、まず自分の為に頑張って欲しい
			このままの意識をもってこれからの任務を遂行して欲しい
			信念を持ち、日々を大切に、おおいにチャレンジして欲しい
			困難や難課題にもあきらめずに頑張って欲しい
			命を大切にする仕事に誇りを持ち、難局にぶつかっていつて欲しい
		将来看護職として立派に社会貢献して欲しい (4)	県内の医療機関に勤務して欲しい
			国家試験に合格し、立派に社会参加して欲しい
			この学生達であれば、いずれ訪れる私の看護、介護を託したい、お願いしたい
			看護の仕事はいろいろな面で負担が大きい、社会貢献に頑張って欲しい
	看護学生の将来に 希望を感じた (12)	学生の将来に希望を感じた(6)	今日会った学生が社会に出て病人の看護に当たってくれたら入院しても安心だ
			すばらしい学生が大勢いてくれて日本の未来が明るく嬉しいと思う
			我々は若者に次世代を安心して引き継げそう
			目標に向かって努力している様子を見て将来に希望がもてた
			将来に向け目的を持ち行動している若者に敬意を払うと共に希望を感じた
			お互いに理解した会話ができ、あらためて若者は国の宝・財産と感じた
		看護職を選択したことに感心(6)	命と向き合う仕事を選択した意思の強い人達だ
			命と向き合う仕事を選択した心の温かい人達だ
			自分の将来を真剣に考え看護の道に進もうとしていて好感がもてた
			看護師という厳しい仕事を選び、目標に向かって努力している姿はすばらしい
			精神的、肉体的にも大変な仕事であることは承知で、あえてこの仕事に従事し、病氣の方々のために尽くす志は大変立派
			人の世話をするという奉仕の気持ちを持っていることに感動した
	将来に期待する(1)	将来に期待する(1)	将来に期待する
目標達成への前向きな姿勢に感心 (17)	目標達成への前向きな 取り組み姿勢 (14)	前向きな取り組み姿勢 (7)	仕事に対する熱意が大である
			本当にこの仕事が好きで一生懸命に勉強している
			前向きな姿勢で取り組んでいる
			一生懸命に吸収しようとしていた
			勉強に真剣に取り組んでいる
			真摯な姿勢で多くを吸収しようとしていた
			ひたむきに勉強に励んでいる姿は美しい
		明確な目的・目標がある(7)	看護師を志し頑張っている
			看護師という目標がある
			目標を持ち勉強していることを肌で感じた
			目的がはっきりしている
			自分の夢(目標)に向かい真剣に取り組んでいる
			目標を持ち目標に向き合う学生
			目標を持ち看護師の道にすすんだだけあり将来に対して夢と誇りを強く持っている
	目的に向かい 努力する姿に感心 (3)	目的に向かい努力する姿に感心 (3)	目的に向かって学んでいる事はすばらしい
			目的を持ち勉強している学生の姿に好感をもった
			明確な目標を持ち夢に向かっていている学生に感心度が深まった

6. 交流事業に対する意見・質問等

交流事業前に本事業に対する意見を自由記載で質問した。得られたデータを内容が一文一義であるよう記述を区切り1記録単位とした結果、以下のような結果が得られた。

- ・ 社会に出てからの看護師の仕事を頑張って欲しい
- ・ 若い者との交流は少ないため、難しい質問で困った
- ・ 一生懸命な若者も多いが、テレビなど見るといい加減な若者が多く日本の将来が心配
- ・ 同じ20才代の若者でも、20才後半の人と初めの人との考えの相違は感じる
- ・ 残り時間もわずかであるため、若者を育てて人生の卒業式を迎えたい
- ・ 若者との時代のギャップの非常に大きいことを常々感じる
- ・ 若者とこれから如何に接していくか、機会を持つことをこれから（ある毎に）していきたい
- ・ 今回が初めてである
- ・ 地区毎に年1回このような事業を催せば、若い人達の交流、知識を得ること等と共に、自分をみつめなおすチャンスになる
- ・ どんな内容か、まだよく判らない
- ・ 若者との交流の場に対し、感謝する
- ・ 地域医療の再生を願っている。医師、看護師不足に真剣に取り組む時、改めて沢山課題があることを考えてしまう。市民、県民の課題、政治の課題とも言え、命がもっとも大切にされる在り様を共に考えたい。このような事業を通じて、地域行政の発展を切望する
- ・ 地域に住む一員として、看護大学のますますの発展、充実を願っている

交流事業後についても同様に、本事業に対する意見を質問し、得られたデータを内容が一文一義であるよう記述を区切り1記録単位とした。さらに内容の類似性により帰納的に分類した。結果は以下の通りである。

企画に対する評価

- ・ 対話のコミュニケーションはすばらしい企画だ
- ・ 親・先生が言っても耳を傾けないが第3者には耳を開く部分があるため非常に効果的
- ・ 核家族の中で過ごす若者、老夫婦のみという家族構成が今の世の中の現状であり、日常的には交流の機会がないため、素晴らしい企画だと思う
- ・ 若者と老人が真剣に話し合う機会は少なく、話し合う事はお互いに理解し合う第一歩だと思ため、この事業は意義がある
- ・ 実技や実践を出来るだけ現場で経験することがよいと思う為、校内だけでない情報を

取り入れるためにも、この事業は効果がある。広く生の情報を受けられる事業を展開してほしい

- ・一部や専門分野だけの出会いでは、納得する常識は育たないと思うため、若者は、国の財産・宝と思う姿勢を基本に考え、将来の夢実現に向けて、厳しさを伝えながら、感情有る人間の接し方について、常識・良識の体感をこの様な事業で学んでほしい
- ・交流事業は意義あると実感した
- ・老年者の看護を考えると、年をとり衰えても、自尊心と誇りを強く持っていることを念頭におき、相手の立場に立った看護が出来る看護師の育成には、このような事業は大変有効であると思うため、今後も続けることを期待する

学生に対する評価

- ・大勢の若者（特に男性もいたのに感心）が看護の仕事に取り組んでいる姿を見て非常に頼もしく思った
- ・今、日本人の中で嫌われる職業として介護士、看護師があげられると思うが、日本人は日本人の手での意気込みで頑張っていると思う
- ・素晴らしい学生ばかりでこんなに素敵な女生徒がいっぱいで涙が出る位うれしい
- ・本日の学生達は最高だ
- ・看護師になりたいという方達が大勢いて、安心し、嬉しく思った
- ・皆様の熱意ある態度に感動した
- ・立派な看護師になり、私達老人の為に心の働きと行動力の働きを願っている
- ・Y大学の近所に住んでいるが、ゴミ出しのルールを守らない学生や道路を横断する際に左右の確認をしない学生が多く、最高学府で学んでいる者のすることかと目を疑うことがあり、一部の者の行為が全体の印象を悪くしている。当県立大学看護学部の学生は、とても感じが良くよかった。
- ・知人の看護師は、思いやりと笑顔が患者を勇気づけると言っていたが、社会に出ると学校で取得した技術に加え、人間関係が大切になってくる。今回同じグループの学生は気遣いの出来る方々で、全員が素晴らしい看護師になれるよう祈っている
- ・会場の一部変更もあったが、親切に何人かの方々に案内され学園の構内の立派な施設と併せ、非常に良い気持ちとさわやかさを覚えた
- ・学生は皆親切で礼儀正しく素敵だ
- ・若者の可能性を信じ応援したい
- ・学生が白衣を着て未来の目標に立ち向かう姿は美しい。これからが始まりであり、たくさんのことを学び、知識や技術、社会の一員として活躍してほしいと願う
- ・現役を区切りにした今、新たに地域に思いを寄せながら、人生を充実していきたい。

人生は冒険であり、それぞれの分野で頑張ろう。命の大切さを忘れずに、素晴らしい看護師になって欲しい

参加して良かった

- ・こんなに素晴らしい授業があることを K 学院に行って知り、お土産などなくても良いのでまた参加したい
- ・若者に私達の出来る事、力になれる様な事があれば微力ながら是非協力させて欲しい
- ・参加させて頂いた事を有難く思う
- ・時間を人のために使うと新しい出会いが生まれると言いますが、今日は本当にその通りだと感じた
- ・参加前は不安と緊張で、理由を見つけて不参加にしようかと思っていたが、私で役に立つならと思い、過去の体験談、友達の病気の事、永遠の別れなど、こんな話で良いのかと思いながらも学生が熱心に聞いてくれたので気持ちよく話すことが出来、帰る時には不安と緊張はなくなりすっきりした気分であった
- ・話を真剣に聞いてもらえる心地よさを感じこの大切さを生活に活かしていこうと思う
- ・学生達の役にたてるのならいくらでも協力したい
- ・核家族が増えている昨今、若者と話す機会を与えていただきありがたく思う
- ・若者と日頃接していないため、戸惑いもあったがマイペースで話し、終わって元気をもらった様な気分となり良いひと時であった
- ・若者達との交流の場を作って頂きありがとうございました
- ・身近な医療介護は、他人ごとではなく自己のことであったり、日々存在する家族であったりする、というような先輩としての話もでき、また逆に刺激を受け、毎日大切に生きることを学んだ。医療の課題を看護学生と一緒に話合うのもよいことだと感じた

お礼は不要

- ・ボールペン 1 本で良く、みやげ等はいらない
- ・先生も生徒も気を使い過ぎなくらいだ
- ・K 学院生は授業であり、ボランティアの気持ちを加味して、お礼はいらないのではと思う

企画への提案

- ・世間話的な内容が多く、テーマを決めて話し合うようにした方が良かった
- ・私のグループには、活発な学生が 3 名、控えめな学生が 2 名いたが全員が活発に飛び込んで来てくれることを望む
- ・私共は来年 3 月に卒業を迎えるが、K 学院の制度の中に大学院があり、今の 2 年生は

恐らく続ける人が多いと思う為、学生が4年生になってどんな成長を遂げているか、2年後にまた話す機会があったらと思った

その他

- ・先生方の対応が大変気持ち良かった
- ・今日の授業で、私もこれから何にでも挑戦し、学生に負けないように頑張って学んでいこうという勇気をもらった
- ・若者から見ると、高齢者も見直さなければいけないことがたくさん有るのではないかな？学生がK学生や高齢者をどのように感じているのか聞いてみたい
- ・何を求めているのか、何のための研究に必要なのか解らない
- ・今日の皆さんは髪を束ねていたので安心したが、衛生上という理由で看護師が帽子をかぶらなくなり床に髪の毛が多くなったという事も聞き、私は髪の毛を下ろしている方が、よほど不潔で、仕事に対して色気を使っていると思えてならない

VI. まとめ

既述のように、本交流事業は、これまで4年間行ってきた事業内容を評価し、今年度は看護学生が授業の一環として行う学内演習にボランティアとして看護の対象者役（「高齢患者」）として参加・協力するという内容・形態に改変した。今回の結果においても、地域リーダー高齢者の若者（ここでは「看護学生」）イメージは、8項目中6項目で有意な差が見られた。また、交流後に若者に対して抱く印象について質的に分析した結果、【看護学生の特徴】 【看護職としての将来への希望と期待】 【目標達成に向けた取り組み姿勢に感心】の3つの最終カテゴリが抽出された。このように、交流事業の内容・形態が昨年度と変わったにもかかわらず、結果に大差なく、世代間交流事業の成果が明らかになった。本研究は、将来看護専門職を目指す看護学生という、ある特定の集団と高齢者との交流ではあったが、本交流により、高齢者、若者双方の理解を深める機会となったといえる。今後、看護学生のみでなく一般大学生などにも対象を広げると共に、幼児期から成人期までのさまざまなライフステージにある人々と高齢者世代との相互交流が課題である。

謝辞

本研究実施にあたり、多大なご協力をいただきましたY県K学院のみなさま、ならびに県中北教育事務所で、平成18年度から平成22年度までK学院を担当された地域教育支援スタッフのみなさまに心より感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 草野篤子：インタージェネレーションの必要性，現代のエスプリ第444号，至文堂，2004. 7.
- 2) 甲斐一郎：ソーシャル・サポート授受の介入研究（世代間交流が高齢者と高校生に与える影響）（研究課題番号10670338），平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書，2002.
- 3) 岩佐一，権藤恭之，増井幸恵他：地域在宅超高齢者における廃用症候群の予防を目指した訪問型介入プログラム「自分史くらぶ」の開発予備的検討，老年社会科学29(1)，75-83，2007. 4.
- 4) 堀洋道監修/吉田富二雄編：心理測定尺度集Ⅱ，412-416，サイエンス社，2002. 6.
- 5) 前掲2)，3-4.
- 6) 藤原佳典，西真理子，渡辺直紀他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果，日本公衆衛生雑誌53(9)，702-714，2006. 9
- 7) 新田淳子，緒方泰子：世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観 介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義，日本看護福祉学会誌10(1)，90-91，2004. 6.
- 8) 渡辺直紀，藤原佳典，西真理子他：都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS”(4) 児童の高齢者イメージ，老年社会科学27(2)，273，2005. 6.
- 9) 流石ゆり子，亀山直子：『健康高齢者実習』の意義－学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討－，日本老年看護学会誌9(1)，65-75，2004. 11.
- 10) 渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究－老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了までの変化－，山梨県立看護大学短期大学部紀要 11(1)，159-166，2006. 3.
- 11) 藤巻尚美，流石ゆり子，牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果－高齢者に対する年齢と色のイメージ変化より－，山梨県立大学看護学部紀要9，35-42，2007. 3.
- 12) 藤巻尚美，流石ゆり子，牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果(第2報)－高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて－，山梨県立大学看護学部紀要10，93-101，2008. 3.
- 13) 勝眞久美子：自律した高齢者との語り合いが看護学生にもたらす効果，日本看護学会論文集 老年看護37，172-174，2007. 2.
- 14) 仲谷明子，松岡佳子，高田由起子：患者と看護師が求める看護師像の相違，日本看護学会抄録集 看護管理39，351，2008. 10.
- 15) 大津廣子，足立みゆき，渡邊亜紀子：前期高齢者と後期高齢者が求める看護師像の違

い，日本看護科学学会学術集会講演集27，287，2007.11.

- 16) 家里かおり，渡邊裕子，倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会抄録集 老年看護35，57，2004.9.
- 17) 渡邊裕子，倉田トシ子，森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集24，322，2004.12.
- 18) 家里かおり，渡邊裕子，倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会論文集 老年看護35，82-84，2005.1.
- 19) 渡邊裕子，小山尚美，流石ゆり子，他：地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感，山梨県立大学看護学部紀要12，9-18，2010.3.

付録・資料 I

1. 調査協力依頼書
2. 交流事業開始前調査票
3. 交流事業終了後調査票
4. 交流事業当日の写真

平成 22 年〇月〇日

K 学院

看護学生との交流事業参加者 殿

『若者（看護学生）との交流に関する研究』への協力について（お願い）

水無月の候、皆様におかれましては、ご健勝にてお過ごしのことと存じます。

このたび、平成 22 年度 K 学院と看護学生との交流事業に、ご協力いただき深く感謝申し上げます。

さて、現在の少子高齢化時代を反映して、全国各地で異世代間交流事業が実施され始めております。そのような中、本事業は、貴学院と本学双方の希望が実現し先進的な取り組みとして、平成 18 年度から開始し、今年度で 5 回目を迎えております。

昨年度は、本交流事業にご参加いただいた皆様に、参加前・後にアンケート調査にご協力いただき、若者（看護学生）との交流についてのご意見を伺いました。今年度はその結果を踏まえ、「看護学生が学内で行う演習に対象者（高齢者）役としてご協力いただく」形での交流に改変した企画といたしました。本企画を通して、皆様の活動への満足度や学生に対するイメージの変化などについて伺い、本企画の評価とともに、今後の皆様のさらなる社会貢献活動の資料としてお役に立てていただきたいと考えました。

調査への協力につきましては、皆様の自由意思を尊重いたします。また、貴学院および個人のお名前が特定できないようにするとともに、得られた結果は研究目的以外では使用いたしません。研究終了後は直ちに破棄いたします。

ご多忙中誠に恐縮ですが、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

なお、交流事業参加後のアンケートは、ご自宅にてご記入の上、添付の封筒（切手貼付）にお入れいただき、平成 22 年〇月〇日までにご投函くださいますよう、お願いいたします。

なお、本研究に関する問い合わせは下記までお願い致します。

研究代表者	流石ゆり子（山梨県立大学 看護学部 老年看護学）
共同研究者	渡邊 裕子（同 上）
	小山 尚美（同 上）
	森田 祐代（同 上）
	萩原理恵子（同 上）
	中澤 緑（同 上）
	水口 哲（山梨県中北教育事務所）
	深沢 勝彦（同 上）
	森本 清（前山梨県中北教育事務所）

連 絡 先 山梨県立大学 看護学部 老年看護学
渡邊 裕子
電話・FAX : 055-253-9904（直通）

『若者（看護学生）との交流事業に関する研究』

No. _____

「若者（看護学生）との交流前」調査用紙

今回の研究協力に関して、以下のどちらかに○をつけて下さい。

同意して協力する



同意せず協力をしない



このままご返却下さい。ありがとうございました。

同意される方は、先にお進み下さい。

☆ 回答には、「該当するものに○をつけていただくもの」と「自由に記述していただくもの」があります。

I まず、あなたご自身についてうかがいます。当てはまる番号に○をつけるか、
（ ）に記入して下さい。

1) 年齢は；（ ） 歳

2) 性別は； 1. 男性 2. 女性

3) 家族構成は；同居しているすべての方に○をつけて下さい。

父・母・義父・義母・配偶者・息子・娘・嫁・婿・孫（ ）人
その他（ ）

4) 18 歳～30 歳以下の若者と話しをする機会がありますか？

1. ある 2. ときどきある 3. ほとんどない

5) 4)で「1. ある」「2. ときどきある」と答えた方にうかがいます。

どなたと、どれくらいの頻度で、何分くらい話しますか。

最も話す若者ひとりを思い浮かべてお答え下さい。

(1) 誰と？； 1. 同居の孫 2. 別居の孫 3. 近所の若者 4. その他（ ）

(2) 頻度？； 1. 毎日 2. 週 1 回程度 3. 月 1 回程度 4. その他（ ）

(3) 何分？； 1. 挨拶程度 2. 30 分以内 3. 60 分以内 4. 1 時間以上

(4) 差し支えなければ、どのようなことを話すのかを簡単にお聞かせ下さい。

【内容】

Ⅱ 「若者（看護学生）との交流事業」についてうかがいます。

- 1) この事業への参加動機として当てはまるものすべてに○をつけて下さい。
1. 「看護学生との交流事業」参加経験者の話を聴いて面白そうだから
 2. 若者と話すことが好きだから
 3. 看護学生の学びに興味があったから
 4. 若者に年長者としての知恵を伝授したいから
 5. 若者と話す機会が少ないから
 6. K学院の年間計画に組み込まれているから仕方なく
 7. その他 ()
- 2) この事業への期待度を教えて下さい。当てはまるもの一つに○をつけて下さい。
1. とても期待している
 2. 期待している
 3. あまり期待していない
 4. まったく期待はしていない
- 3) この事業にあなたが期待することはどんなことですか。当てはまるものすべてに○をつけて下さい。
1. 看護学生の話がたくさん聞きたい
 2. 自分が看護学生にたくさん話したい
 3. 看護学生の学びをサポート（手助け）したい
 4. 現代の看護学生を理解したい
 5. 看護学生に自分たちの世代を理解してほしい
 6. その他 ()

Ⅲ 次のような活動を、現在どれくらいされていますか。
当てはまるものの一つに○をつけて下さい。

- 1) 地域の行事（お祭り・盆踊りなど）への参加
1. していない 2. ときどきしている 3. いつもしている
- 2) 町内会や自治会活動
1. していない 2. ときどきしている 3. いつもしている
- 3) 老人会（老人クラブ）活動
1. していない 2. ときどきしている 3. いつもしている
- 4) 趣味の会など、仲間うちの活動
1. していない 2. ときどきしている 3. いつもしている
- 5) 奉仕活動・ボランティア活動
1. していない 2. ときどきしている 3. いつもしている

Ⅳ 「生活の中での満足感・やる気」についてうかがいます。
以下の 16 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	当てはまる	まあまあ当てはまる	どちらとも言えない	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	私は今の生活に満足感があります	5	4	3	2	1
2	私は他人から信頼され頼りにされています	5	4	3	2	1
3	毎日が平和で楽しいと感じています	5	4	3	2	1
4	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいます	5	4	3	2	1
5	私の行為で人に喜んで貰えることがよくあります	5	4	3	2	1
6	自分の人生に大きな期待を持っています	5	4	3	2	1
7	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っています	5	4	3	2	1
8	私の毎日は充実していると思います	5	4	3	2	1
9	私は今幸せを感じています	5	4	3	2	1
10	世界がバラ色に輝いて見えることがあります	5	4	3	2	1
11	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っています	5	4	3	2	1
12	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくあります	5	4	3	2	1
13	今やり甲斐のあることをしています	5	4	3	2	1
14	私は課せられた役割をよく果たしています	5	4	3	2	1
15	私は現在の自分の能力を精一杯発揮しています	5	4	3	2	1
16	努力した結果報われたと感じることがあります	5	4	3	2	1

V 皆様が日頃、若者に対してお持ちのイメージについてうかがいます。以下の 8 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	非常に そう思う	やや そう思う	どちら とも言 えない	あまり そう思 わない	全く そう思 わない
1	20 歳代の若者は、社会に貢献している	5	4	3	2	1
2	20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている	5	4	3	2	1
3	20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる	5	4	3	2	1
4	20 歳代の若者は、何を考えているのかわからない	5	4	3	2	1
5	20 歳代の若者は、話しやすい	5	4	3	2	1
6	20 歳代の若者は、きちんとしている	5	4	3	2	1
7	20 歳代の若者は、あたたかい	5	4	3	2	1
8	20 歳代の若者は、強い	5	4	3	2	1

VII この事業に関してご意見・ご質問等がございましたら、ご自由にお書き下さい。

質問は以上です。ご協力、まことにありがとうございました。

『若者（看護学生）との交流事業に関する研究』

No. _____

「若者（看護学生）との交流後」調査用紙

☆ 回答には、「該当するものに○をつけていただくもの」と「自由に記述していただくもの」があります。

I 「若者（看護学生）との交流事業」についてうかがいます。

あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) この事業の満足度を教えてください。
 1. まったく満足できなかった
 2. 期待していたより満足度は低かった
 3. 期待していたとおりの満足度であった
 4. 期待以上の満足度であった
- 2) 今日交流した若者（看護学生）は真剣にお話を聞いていましたか。
 1. まったく聞いていなかった
 2. あまり聞いていなかった
 3. どちらともいえない
 4. まあまあ聞いていた
 5. とてもよく聞いていた
- 3) ご自分のお話が若者（看護学生）に十分理解されたと思いましたか。
 1. まったく理解されていなかったと思う
 2. あまり理解されていなかったと思う
 3. どちらともいえない
 4. まあまあ理解されていたと思う
 5. とてもよく理解されていたと思う
- 4) 若者（看護学生）に対して感じたことをご自由にお書き下さい。

Ⅱ 次のような活動に今後どれくらい参加しようと思っていますか。
あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) 地域の行事（お祭り・盆踊りなど）への参加
 1. 参加しない
 2. ときどき参加する
 3. いつも参加する
- 2) 町内会や自治会活動
 1. 参加しない
 2. ときどき参加する
 3. いつも参加する
- 3) 老人会（老人クラブ）活動
 1. 参加しない
 2. ときどき参加する
 3. いつも参加する
- 4) 趣味の会など、仲間うちの活動
 1. 参加しない
 2. ときどき参加する
 3. いつも参加する
- 5) 奉仕活動・ボランティア活動
 1. 参加しない
 2. ときどき参加する
 3. いつも参加する

Ⅲ 次のような活動の依頼が今後あったとしたら、あなたは引き受けると思いますか。
あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- 1) 近所の小学校に出向いて、小学生に自分の経験を話す。
 1. 引き受けない
 2. どちらとも言えない
 3. 引き受ける
- 2) 大学で看護学部の授業に参加し、看護学生に自分の経験を話す。
 1. 引き受けない
 2. どちらとも言えない
 3. 引き受ける
- 3) 大学で看護学部の授業に参加し、看護学生が血圧や脈拍の測定をすることに協力する。
 1. 引き受けない
 2. どちらとも言えない
 3. 引き受ける

IV 「生活の中での満足感・やる気」についてうかがいます。

以下の 16 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

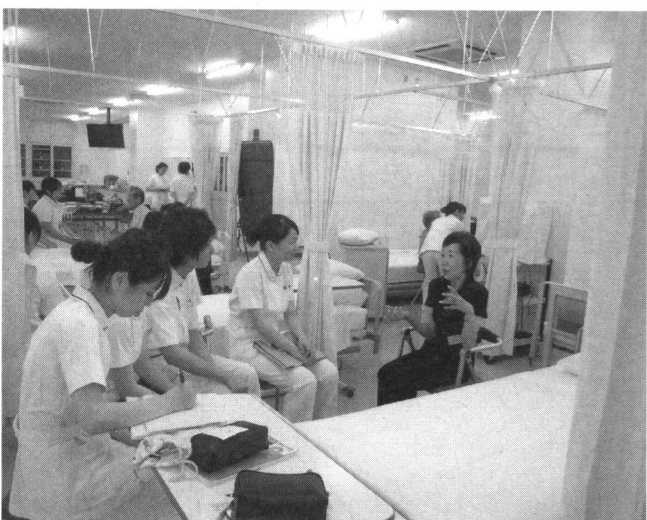
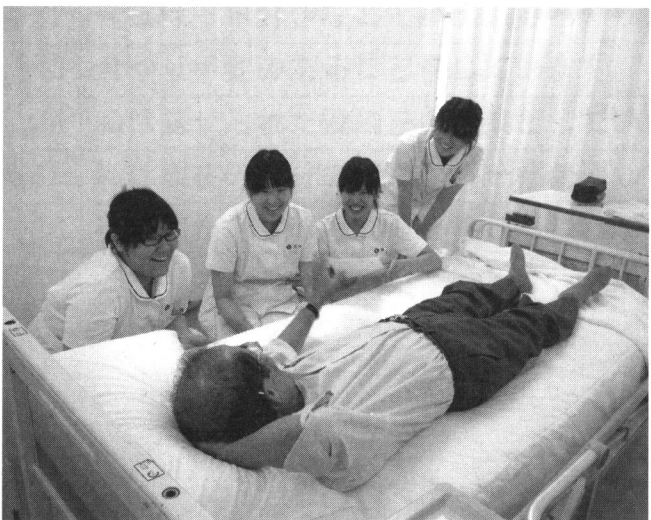
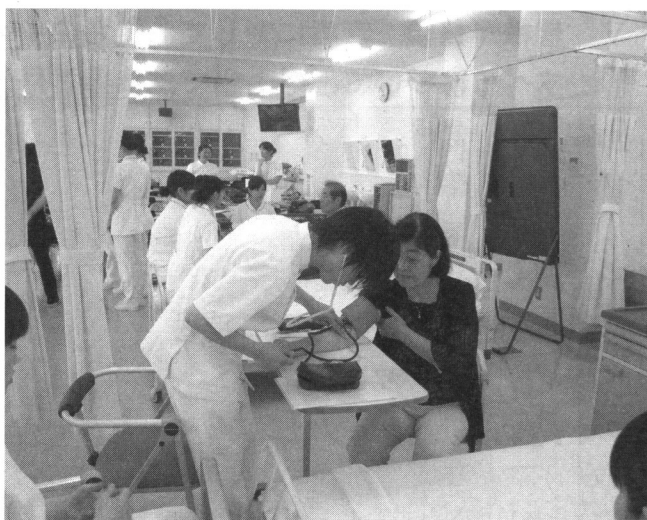
No	項目	当 て は ま る	ま あ ま あ 当 て は ま る	ど ち ら と も 言 え な い	あ ま り 当 て は ま ら な い	当 て は ま ら な い
1	私は今の生活に満足感があります	5	4	3	2	1
2	私は他人から信頼され頼りにされています	5	4	3	2	1
3	毎日が平和で楽しいと感じています	5	4	3	2	1
4	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでいます	5	4	3	2	1
5	私の行為で人に喜んで貰えることがよくあります	5	4	3	2	1
6	自分の人生に大きな期待を持っています	5	4	3	2	1
7	私は好きなものを飲んだり食べたりする機会をよく持っています	5	4	3	2	1
8	私の毎日は充実していると思います	5	4	3	2	1
9	私は今幸せを感じています	5	4	3	2	1
10	世界がバラ色に輝いて見えることがあります	5	4	3	2	1
11	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っています	5	4	3	2	1
12	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくあります	5	4	3	2	1
13	今やり甲斐のあることをしています	5	4	3	2	1
14	私は課せられた役割をよく果たしています	5	4	3	2	1
15	私は現在の自分の能力を精一杯発揮しています	5	4	3	2	1
16	努力した結果報われたと感じることがあります	5	4	3	2	1

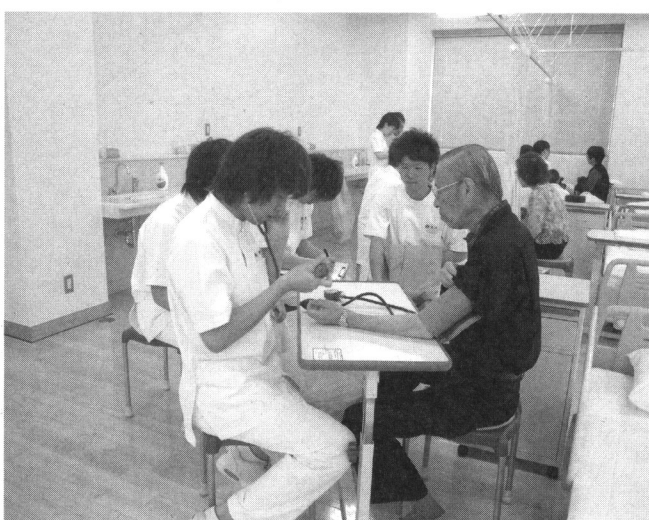
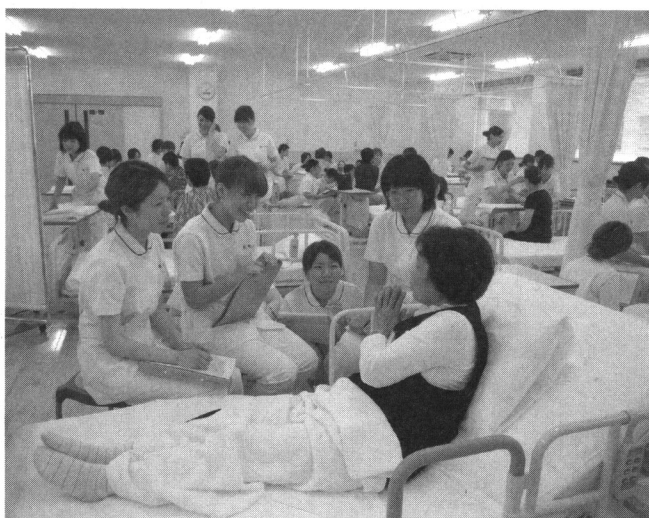
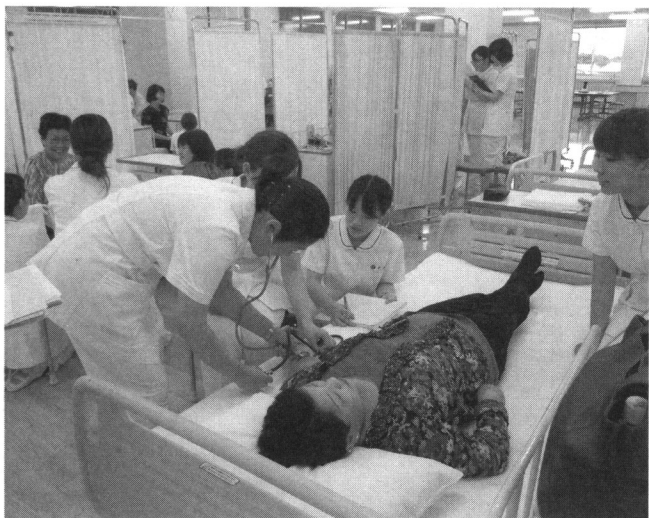
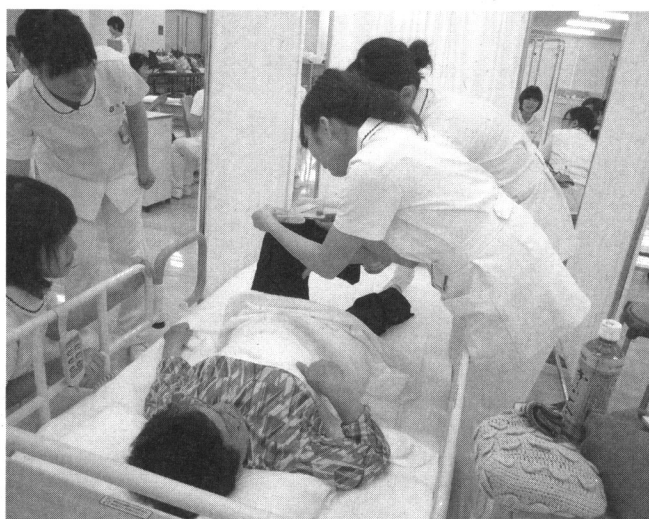
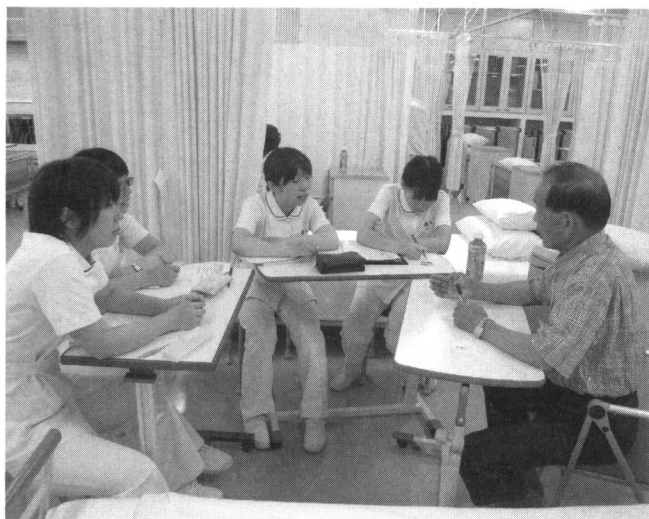
V 皆様が日頃、若者に対してお持ちのイメージについてうかがいます。以下の 8 項目のすべてについて、最も当てはまる番号一つに○をつけて下さい。

No	項目	非常に そう 思う	やや そう 思う	ど ちら とも 言 え な い	あ ま り そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い
1	20 歳代の若者は、社会に貢献している	5	4	3	2	1
2	20 歳代の若者は、親や周囲に甘やかされている	5	4	3	2	1
3	20 歳代の若者は、これからの活躍が期待できる	5	4	3	2	1
4	20 歳代の若者は、何を考えているのかわからない	5	4	3	2	1
5	20 歳代の若者は、話しやすい	5	4	3	2	1
6	20 歳代の若者は、きちんとしている	5	4	3	2	1
7	20 歳代の若者は、あたたかい	5	4	3	2	1
8	20 歳代の若者は、強い	5	4	3	2	1

VI この事業に関してご意見・ご質問等がございましたら、ご自由にお書き下さい。

質問は以上です。ご協力、まことにありがとうございました。





付録・資料Ⅱ

研究成果の公表

1. 第41回 日本看護学会－老年看護－（奈良）研究報告

- 1) 抄録
- 2) 示説資料

2. 山梨県立大学看護学部 紀要 研究報告

地域リーダー高齢者が若者に対して抱く印象

- 『看護学生との交流事業』後の調査から -

Key words ; 地域リーダー高齢者、看護学生、世代間交流

○萩原理恵子 中澤緑 小山尚美 渡邊裕子 流石ゆり子(山梨県立大学 看護学部)

水口哲 (山梨県中北教育事務所) 森本清 (前山梨県中北教育事務所)

I. 目的:『若者(看護学生)との交流事業』に参加した地域リーダー高齢者(以下、高齢者)が看護学生(以下、学生)に対して抱く印象を明らかにする。

II. 対象と方法:本研究は 2009 年 6 月実施の『若者(看護学生)との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足度・心理・若者イメージの変化』に関する研究結果から、『若者(看護学生)との交流事業』実施後の調査票の自由記述欄に回答のあった高齢者 23 名の「看護学生に対して抱く印象」に関する記述部分を分析対象とした。なお、上記した本研究のベース研究は「活力に満ちた地域づくりの指導者養成」を目的とした高齢者のための生涯学習大学校(修業 2 年間)に在学し、『若者(看護学生)との交流事業』に参加した 24 名に交流前・後にアンケート調査を実施したものである。データの分析は、内容分析法を参考にし、「高齢者が看護学生に対して抱く印象」に関する記述を抽出した。内容が一文一義であるよう記述を区切り 1 記録単位とし、さらに内容の類似性により帰納的に分類・抽象化し、最後に記録単位の出現頻度・比率を算出した。分析は、共同研究者間で一致をみるまで繰り返した。なお分析には、老年看護学の専門家によるスーパーバイズを受けた。

III. 倫理的配慮:対象者に本研究の目的・調査内容および方法・協力の任意性・協力を拒否しても不利益は一切生じないこと・同意は撤回できること・データは匿名化し、研究目的にのみ使用する旨を、文書と口頭にて十分説明を行い、本人の自由意思を尊重した。

なお、本研究は山梨県立大学看護学部研究倫理審査委員会にて『承認』を得ている。

IV. 結果:自由記述のあった 23 名の 50 記録単位を分析した結果 16 カテゴリーが形成された。なお【】はカテゴリ名、数字は記録単位数を表す。高齢者が交流事業実施後、学生に抱く印象は【高齢者から学生に伝えたいことは○○だ(8)】【前向きな姿勢(6)】【真面目で真剣な態度に感激した(4)】【目的意識がある(4)】【勤勉(4)】【傾聴する姿勢(3)】【捉えにくい学生像(3)】【自分の考えを持っている(3)】【看護への熱い思いがある(3)】【素直(2)】

【未来への期待(2)】【頼もしい(2)】【明るく元気(2)】【清楚で礼儀正しい(2)】【看護をしていく上で大切な優しさがある(1)】【分別・判断する能力がある(1)】の 16 カテゴリーで、その内 14 カテゴリーがプラス面、1 カテゴリーがマイナス面の印象、学生に伝授したい内容が 1 カテゴリーであった。記録単位数が最多の【高齢者から学生に伝えたいことは○○だ】の主な内容は、「若者は、物がない時代に育った私達高齢者の様子を聞き、物を節約し生きて欲しい」「我慢することが大事」「今からの看護を背負っていく若者に、日本の将来を担う自信を植え付けてもらいたい」「苦勞し悩みもあるが、それが今後の人生に役立つ」「看護師になる勉強だけでなく、人間としての成長を学ぶことが必要である」等であった。

V. 考察:高齢者が交流後に学生に抱く印象は、【前向きな姿勢】【真面目で真剣な態度に感激した】【目的意識がある】【看護への熱い思いがある】等が多かった。これらは、交流が単なる日常会話に留まらず、学生の内面にある考えや、将来の職業への想いにまで話題が及んでいた為であると思われる。また【傾聴する姿勢】からも分かるように、交流場面における学生の支持・受容的な態度は相互のコミュニケーションを円滑にしていた。このように高齢者の学生に対するプラス面の印象が多かった要因には、学生の支持・受容的な態度や良好なコミュニケーションによる影響があったと考えられる。一方高齢者は、若者に対し生きていく上での我慢や困難の乗り越え方、物を大切にする姿勢、多くの経験を積み人間として成長すること等の人生訓や英知を若者に伝える機会を求めていることが明らかになった。

VI. 結論:①交流事業後、高齢者が学生に対して抱いた印象は、プラス面の印象が 14 カテゴリー、マイナス面が 1 カテゴリーおよび学生に伝承したい内容が 1 カテゴリーあった。②プラス面の印象は、交流が日常会話に留まらず、学生の内面の考えや看護職をめざす想いを聞くことにまで及んだ結果得られた内容が多かった。③高齢者は、長年に亘り培った英知や人生訓を若い世代に伝承したいと考えていることが明らかになった。

I. 目的

『若者（看護学生）との交流事業』に参加した地域リーダー高齢者（以下、高齢者）が看護学生（以下、学生）に対して抱く印象を明らかにする。

「地域リーダー高齢者」とは、「活力に満ちた地域づくりの指導者養成」を目的とした高齢者のための生涯学習大学校（修業2年間）に在学している高齢者を指す。

III. 倫理的配慮

本研究の目的・調査内容および方法・協力の任意性・協力を拒否しても不利益は一切生じないこと・同意は撤回できること・データは匿名化し、研究目的にのみ使用する旨を文書と口頭にて充分説明を行い、本人の自由意志を尊重した。
尚、本研究は機関内研究倫理審査委員会にて『承認』されている。

II. 対象と方法

1. 分析対象

『若者（看護学生）との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足感・心理・若者イメージの変化』に関する研究結果から、『若者（看護学生）との交流事業』実施後の調査票の自由記載記述欄に回答のあった高齢者23名の「看護学生に対して抱く印象」に関する記述部分を分析対象とした。

IV. 結果および考察

自由記載のあった23名の50記録単位を分析した結果16カテゴリが形成された。
（表1）
その内、14カテゴリがプラス面の印象、マイナス面の印象および学生に伝承したい内容が、各1カテゴリずつであった。
以下、【】はカテゴリ、数字は記録単位数を示す。

2. データ分析方法

ベレルソンによる内容分析法を参考に「高齢者が学生に対して抱く印象」に関する記述を抽出。
↓
内容が一文一義であるように記述を区切り1記録単位とする。
↓
内容の類似性により帰納的に分類・抽象化。
↓
最後に記録単位の出現頻度・比率を算出。

表1 地域リーダー高齢者が看護学生に対して抱く印象	
カテゴリ（記録単位数）	記録単位
高齢者から学生に伝えたいことは〇〇だ（8）	若者は、物がない時代に育った私達高齢者の様子を聞き、物を節約し、生きて欲しい
	我供することが大事
	今からの看護を習得していく若者に、日本の将来を担う自信を植え付けてもらいたい
	苦労し悩みもあるが、それが今後の人生に役立つ
前向きな姿勢（6）	看護師になる勉強だけでなく、人間としての成長を学ぶことが必要
	若者に願うことは、声を大きく、明るく、愛情、態度を生き生きと表すこと
	学生たちは恵や失敗の経験を通し、多くの友達を得て人間として大きくなっていく
	技術の習得は勿論、多くの雑学を学び、患者や老人の良き相談相手となることを期待する
真面目で真剣な態度に感激した（4）	前向きでしっかりと考えた考えを持っている
	前向きに頑張っている
	積極性がある
	文芸会に参加した学生は、前向きな姿勢であった
目的意識がある（4）	物事を進んでしようとする姿勢
	何事も前向きにとらえている
	看護の大変な仕事をしようというだけあり真剣さがある
	学生に励む学生たちの真剣な姿に感動
勤勉（4）	学生たちの行動は、真剣な態度をとっている
	大変真面目
	将来の目標が持たず、何の目標について良いのか決められない人が多い中、確たる目的に向かって邁進することは敬服の至りである
	自分の将来について考えている
勤勉（4）	出席した学生達は、何かを求めて来た感じがした
	目的意識が明確
	看護という良い使命感をもって勉学に励むことは非常に立派
	勤勉
勤勉（4）	良く勉強している
	真剣に勉強に取り組んでいる

傾聴する姿勢 (3)	熱心に話を聞いてくれたので、もっと学生と話したかった よく聞く耳を持っている 人の話を真剣に聞く姿勢に好感を抱いた 夢を持ち、前向きに進んでいるのか
捉えにくい学生 (3)	自分に自信を持ち、勉学に励んでいる学生がどの程度いるのか 学生は世の中の知識もあり、反応も見せていたが、本心に感じているのか、何を考えているのかは分からない
自分の考えを持っている (3)	学生は自分の考えをしっかりと持っている 就職時期が近づいている学生は、自分自身をしっかりと見つめている 自分のことをはっきり人に伝えられる
看護への熱い思いがある (3)	看護師になることに夢がある 看護師になろうとする理由や意欲を聞き、頼もしく思えた 看護の道に生きる思いの強さ、使命感をにじませていた
素直 (2)	素直 素直
未来への期待 (2)	看護という大変な仕事を選択した学生たちに期待 久しぶりに次世代に頼るさを感じた 素晴らしい学生が巣立つと思った
頼もしい (2)	頼もしい 頼もしい
明るく元気 (2)	元氣 明るい
清楚で礼儀正し (2)	礼儀正しい 清楚
看護をしていくうえで大切な優しさがある (1)	看護をしていく上で大切な優しさがある
分別・判断する能力がある (1)	分別・判断能力がある

V.結論

- ① 高齢者が学生に対して抱いた印象は、プラス面の印象が14カテゴリ、マイナス面の印象および学生に伝承したい内容が1カテゴリであった。
- ② プラス面の印象は、交流が日常会話に留まらず、学生の内面の考えや看護職をめざす想いを聞くことにまで及んだ結果得られた内容が多かった。
- ③ 多くの高齢者は、長年に亘り培った英知や人生訓を若い世代に伝承したいと考えていた。

1.若者へのプラス面の印象

【前向きな姿勢】【目的意識がある】
【看護への熱い思いがある】等が多い
→交流が単なる日常会話に留まらず、学生の内面にある考えや将来の職業への想いにまで話題が及んでいたと考えられる。

【傾聴する姿勢】
→交流場面による学生の支持的・受容的態度が相互のコミュニケーションを円滑にしていた。



プラス面の印象が多かった要因は上記の影響があったと考えられる。

2.若者に伝承したい内容

【高齢者から学生に伝えたいことは〇〇だ】
記録単位数は最多であった。
→高齢者は学生に対し、生きてく上での我慢や困難の乗り越え方、物を大切にする姿勢、多くの経験を積み人間として成長すること等、人生訓や英知を伝える機会を求めていた。

看護学生との交流による地域リーダー高齢者の 若者イメージの変化

渡邊裕子¹⁾ 森田祐代¹⁾ 流石ゆり子¹⁾ 萩原理恵子¹⁾
小山尚美¹⁾ 中澤緑¹⁾ 水口哲²⁾ 森本清³⁾ 深沢勝彦⁴⁾

要 旨

著者らの先行研究「地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感」の成果を踏まえ、「地域リーダー高齢者が看護学生の授業に看護の対象者役として参加しながら交流する」という企画を実施し、若者イメージと看護学生に感じたことを調査した。地域リーダー高齢者は看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れ、交流前の「何を考えているかわからない」というイメージが少なくなり、「あたたかさ」や「きちんとしている」というイメージが増加した。同時に目標に向かって学修する看護学生の芯の強さを目の当たりにし、交流の中で人生の先輩として教訓や応援を、積極的且つ自然に伝える姿があった。世代間交流の場として、本企画の有効性と、対象を広く地域在住高齢者に広げて継続的に実施する必要性が示唆された。

キーワード：地域リーダー高齢者 若者イメージ 看護学生 交流事業

I はじめに

少子高齢社会の昨今、家庭や地域社会の中で異世代がかかわり合う機会が減少しており、高齢者と若者の相互理解の促進を目的にした「異世代間交流」が叫ばれている^{1)~3)}。A県においても、「生涯学習の理念に立ち、人生80年時代の高齢者に対して、専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し、高齢者の学習ニーズに応えるとともに、高齢者の生きがいづくりを支援し、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的に、修業2年間で高齢者が学習する機会を設けている⁴⁾。その中に異世代間交流を目的とした『若者との交流』講座があり、看護学部の学生と高齢者が一緒に歌やゲームを楽しんだり、高齢者がライフヒストリーを語り人生の先輩として学生に言葉を贈ったりするなど、相互の交流を図ってきた。この事業は、平

成18年度にスタートし4年間継続実施している。

高齢者と若者との交流については、主に児童から高校生までを対象とした多くの介入研究^{5)~9)}がなされ、看護学生を対象とした「高齢者イメージ」に関連した研究は多くある^{10)~18)}。我々も臨地実習や同居祖父母との交流による「高齢者イメージ」を検証してきた。しかし、異世代間交流、特に看護学生との交流が高齢者の若者イメージに及ぼす影響や高齢者の若者イメージの変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証したものはほとんどない。

昨年度著者らは、看護学生との交流が高齢者の若者イメージに及ぼす影響や高齢者の若者イメージの変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証するための第一歩として、「若者との交流事業」に参加した地域リーダー高齢者24

(所 属)

1) 山梨県立大学看護学部 老年看護学領域

2) 山梨県中北教育事務所 地域教育支援

3) 前山梨県中北教育事務所 地域教育支援

4) 元山梨県中北教育事務所 地域教育支援

名を対象に、高齢者が抱えている若者イメージと交流に対する期待感について調査研究を行った^{19)～22)}。その結果、高齢者は「世間一般の今どきの20歳代の若者」イメージとして、「話しやすいが何を考えているのかが分からない」と思っている傾向があった。一方、「若者との交流」への期待度は95.8%と高く、分かり合いたい思いがあるが、自分から知恵を伝授するといった意識を持って参加した者は少なかった。

そこで今年度は、高齢者が若者の役に立っているという社会貢献への意識を持って参加できるよう、交流のスタイルを上述内容での個別・集団交流から、高齢者に「看護の対象者役」として専門職をめざす学生の教育の一部に関わる中での交流プログラムに改変した。また、参加する高齢者には「看護学生に先輩としての知恵を伝授する」という役割認識で交流プログラムに臨めるように事前に説明会を開き導入を行った。

今回、改変した「若者との交流事業」の参加前後で、地域リーダー高齢者の若者イメージと比較し、看護学生との交流が高齢者の若者イメージに及ぼす影響について検証し、高齢者の若者に対する役割認識への活性化に向け示唆を得たので報告する。

II 用語の定義

本研究では、「地域リーダー高齢者」「看護学生」を以下の定義で用いる。

1. 地域リーダー高齢者

A県が「生涯学習の理念に立ち、人生80年時代の高齢者に対して、専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し、高齢者の学習ニーズに応えとともに、高齢者の生きがいづくりを支援し、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」を目的に、修業2年間で企画している高齢者のための生涯学習大学校（B学院）に在学している概ね60歳以上の高齢者。

2. 看護学生

4年制大学の看護学部看護学科の学生。

III 交流事業の概要

B学院の年間プログラムの中にある「若者との交流」事業（以下「交流事業とする」）。地域リーダー高齢者は、看護学生が授業の一環として行う演習に、ボランティアの立場から看護の対象者役（ここでは「高齢患者」）として参加・協力する。

具体的には、参加する高齢者の健康状況は様々であるため、事前に健康に関する簡単な情報（既往歴・現在治療中又は経過観察中の疾患の有無・内服薬を含む具体的な治療・通院はしていないが気になる症状）を、本人の意思に基づいて提供を求める。当日は学生の1グループ（学生4～5名で1グループを編成）に高齢患者役として参加し、学生の質問やバイタルサイン測定などに協力する。学生は対象から事前に提供された情報について看護の視点から情報の意味や他に必要な情報などについて考えた上で演習に臨み、実際に高齢者と接する中でさらに情報を深め、ヘルスアセスメントを行う。演習時間は約2時間とし、演習終了後に高齢者と学生が自由に意見交換のできる時間（20分程度）を設け、高齢者から人生の先輩として、専門職をめざす看護学生にアドバイスをを行うことで、高齢者と学生が相互に理解を深められるような設定とする。

IV 研究目的

看護学生との交流事業による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化を明らかにする。

V 研究方法

1. 研究デザイン

調査研究（自記式質問紙法）

2. 調査対象

「活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的とした高齢者のための生涯学習大学校（修業2年間）の2年生で、看護学生との交流事業に今回初めて参加した38名。

3. 調査日

平成22年6月

4. 調査方法

平成22年6月の交流事業開始直前に、交流の企画・運営に関係しない共同研究者が研究の概要を文書と口頭で説明後、研究に同意が得られた協力者（以下 調査対象者）に調査票を一斉配付し、「交流事業」前の調査票はその場で回収。「交流事業」後の調査票は2週間以内に郵送にて回収した。なお、前後比較を行うため、同一番号を付した調査票をセットにし、個人が特定されないために受付番号と一致しないよう、ランダムに配付した。

5. 調査内容

1) 基本属性

年齢、性、若者と話す機会（「交流事業」前のみ）

2) 若者イメージ

甲斐らが「看護学生が高齢者の自宅を訪問し経験談を聞かせていただく」という介入研究の前調査に用いた「若者イメージ尺度¹⁰⁾」を参考にした「20歳代の若者は〇〇」という設問で、具体的には「社会に貢献している」、「親や周囲に甘やかされている」、「これからの活躍が期待できる」、「何を考えているのかわからない」、「話しやすい」、「きちんとしていいる」、「あたたかい」、「強い」の8項目、8項目それぞれに対し、「非常にそう思う」～「全くそう思わない」の5段階で回答する（「交流事業」前・後）。この「若者イメージ尺度」は、高齢者の若者イメージに関連する先駆的研究で使用されており、看護学生との交流前に調査している点でも本研究と共通することから参考にした。

6. 分析方法

調査内容の各項目について単純集計を行った後、基本属性（性別、年齢、若者と話す機会と

頻度）を独立変数、若者イメージを従属変数としクロス集計を行ない、 χ^2 検定により比較した。若者イメージは、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を「思う」、「あまり思わない」と「全く思わない」を「思わない」とした。なお、統計処理にはSPSS16.0J for Windowsを用いた。

7. 倫理的配慮

対象者に本研究の目的・調査内容・調査方法・研究結果の公表・協力の任意性・研究協力を拒否しても不利益は一切生じないこと・同意は撤回できること・「交流事業」の前後で比較を行うため、同一番号を付した調査票を配付するが、データは匿名化され研究目的にのみ使用する旨について記載した文書を用いて口頭で十分な説明を行い、調査票の冒頭には「協力する」「協力しない」の選択肢を付し自由意思を尊重した。

なお、本研究は山梨県立大学看護学部研究倫理審査委員会の審査にて、『承認』を得ている。

VI 結果

対象者38名全員から回答が得られ（回収率100%）、その内有効回答が得られた35名（92.1%）を分析対象とした。

1. 基本属性

1) 年齢・性別

対象者の平均年齢は 67.7 ± 3.3 歳で、男性10名（28.6%）、女性25名（71.4%）。男女別の平均年齢は、男性 70.4 ± 3.7 歳、女性 66.7 ± 2.5 歳であった。

2) 若者と話す機会

「18～30歳以下の若者と話をする機会があるか」の問に、「ある」が9名（25.7%）、「ときどきある」が12名（34.3%）、「ほとんどない」14名（40.0%）であった（図1）。

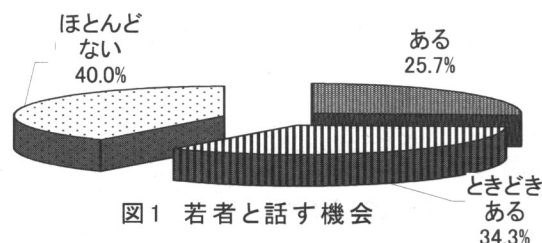


図1 若者と話す機会

「ある」又は「ときどきある」と答えた21名
の話す頻度は、「週1回程度」が9名（42.9%）
で最も多く、次いで「月1回程度」が5名
（23.8%）で、「毎日」は1名（4.8%）であった。
また、どれくらいの時間話すかでは、「30分以
内」が10名（47.6%）で最も多く、次いで「挨拶
程度」が5名（23.8%）で、「1時間以上」は

3名（14.3%）であった。

2. 地域リーダー高齢者の若者イメージ

若者イメージ8項目の「交流事業」前（図2・
表1）と「交流事業」後（図3・表2）の回答は図・
表に示すとおりであった。

「交流事業」前に「思う」は、「これからの活

	非常にそう思う		ややそう思う		どちらとも言えない		あまり思わない		全く思わない	
社会に貢献している	2	5.7%	11	31.4%	11	31.4%	11	31.4%	0	0.0%
親や周囲に甘やかされている	6	17.1%	17	48.6%	5	14.3%	6	17.1%	1	2.9%
これからの活躍期待できる	15	42.9%	11	31.4%	7	20.0%	2	5.7%	0	0.0%
何を考えているかわからない	0	0.0%	15	42.9%	20	57.1%	0	0.0%	0	0.0%
話しやすい	3	8.6%	7	20.0%	17	48.6%	8	22.9%	0	0.0%
きちんとしている	0	0.0%	4	11.4%	27	77.1%	4	11.4%	0	0.0%
あたたかい	0	0.0%	8	22.9%	24	68.6%	3	8.6%	0	0.0%
強い	1	2.9%	4	11.4%	19	54.3%	10	28.6%	1	2.9%

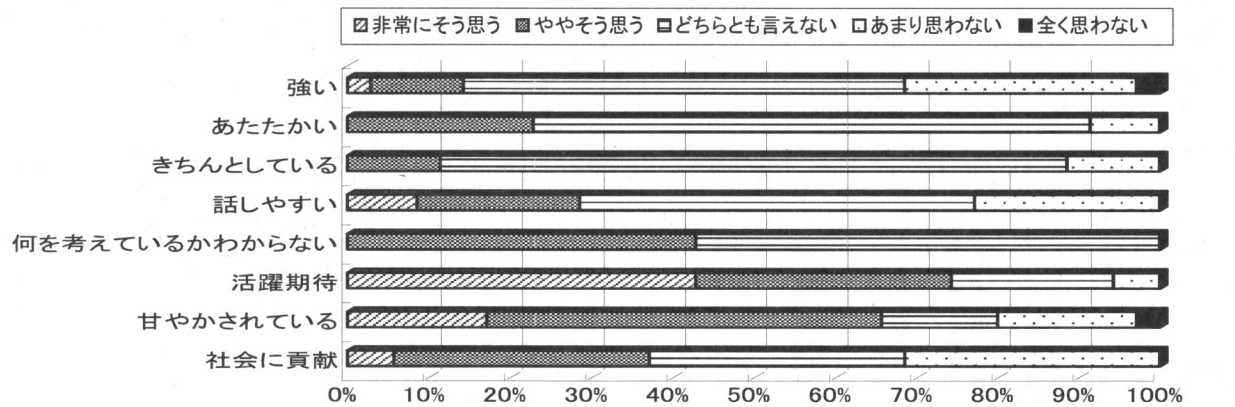


図2 「交流事業」前の地域リーダー高齢者の若者イメージ

	非常にそう思う		ややそう思う		どちらとも言えない		あまり思わない		全く思わない	
社会に貢献している	5	14.3%	12	34.3%	15	42.9%	3	8.6%	0	0.0%
親や周囲に甘やかされている	4	11.4%	20	57.1%	7	20.0%	4	11.4%	0	0.0%
これからの活躍期待できる	18	51.4%	14	40.0%	2	5.7%	1	2.9%	0	0.0%
何を考えているかわからない	0	0.0%	11	31.4%	15	42.9%	7	20.0%	2	5.7%
話しやすい	5	14.3%	15	42.9%	11	31.4%	4	11.4%	0	0.0%
きちんとしている	4	11.4%	18	51.4%	10	28.6%	3	8.6%	0	0.0%
あたたかい	4	11.4%	18	51.4%	10	28.6%	2	5.7%	1	2.9%
強い	0	0.0%	14	40.0%	17	48.6%	2	5.7%	2	5.7%

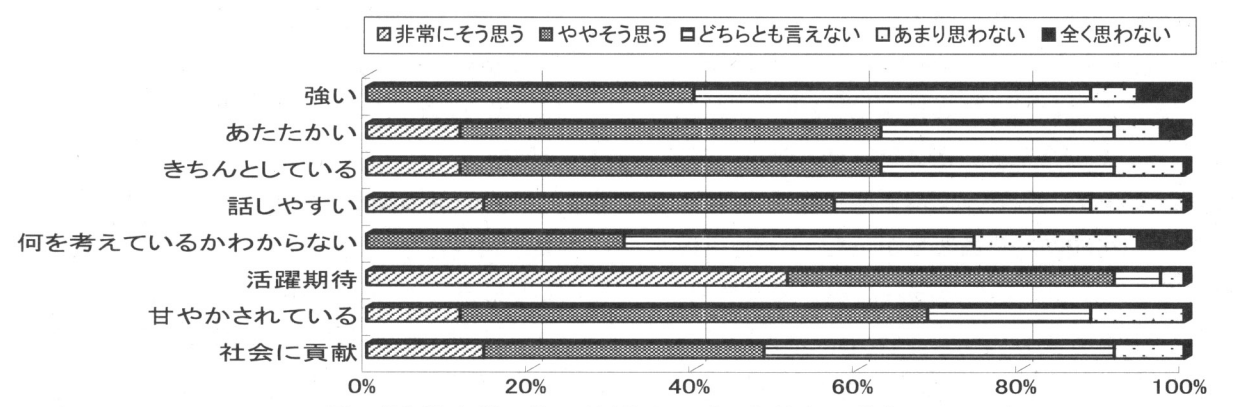


図3 「交流事業」後の地域リーダー高齢者の若者イメージ

躍が期待できる」が26名（74.3%）で最も多く、次いで「親や周囲に甘やかされている」が23名（65.7%）、「何を考えているかわからない」が15名（42.9%）の順であった。また、「思わない」は、「社会に貢献している」11名（31.4%）、「話しやすい」8名（22.9%）の順で多かった。

次に「交流事業」後では、「思う」は「交流事業」前と同様に「これからの活躍が期待できる」が32名（91.4%）、「親や周囲に甘やかされている」が24名（68.6%）の順で多く、次いで「きち

んとしている」「あたたかい」が各22名（62.9%）であった。また、「思わない」は「何を考えているかわからない」が9名（25.7%）で最も多かった。

交流の前後を比較すると「きちんとしている（ $p=0.00004$ ）」、「あたたかい（ $p=0.0021$ ）」、「何を考えているかわからない（ $p=0.0057$ ）」、「強い（ $p=0.0219$ ）」の4項目で有意な差がみられた（表3・図4）。

表3：地域リーダー高齢者の若者イメージの変化（「交流事業」前後の比較） (n=35)

項目	思う				どちらとも言えない				思わない				有意確率 *$p \leq 0.05$ **$p \leq 0.01$
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
社会に貢献している	13	37.1%	17	48.6%	11	31.4%	15	42.9%	11	31.4%	3	8.6%	0.0573
親や周囲に甘やかされている	23	65.7%	24	68.6%	5	14.3%	7	20.0%	7	20.0%	4	11.4%	0.5563
これからの活躍期待できる	26	74.3%	32	91.4%	7	20.0%	2	5.7%	2	5.7%	1	2.9%	0.2367
何を考えているかわからない	15	42.9%	11	31.4%	20	57.1%	15	42.9%	0	0.0%	9	25.7%	** 0.0057
話しやすい	10	28.6%	20	57.1%	17	48.6%	11	31.4%	8	22.9%	4	11.4%	0.0510
きちんとしている	4	11.4%	22	62.9%	27	77.1%	10	28.6%	4	11.4%	3	8.6%	** 0.00004
あたたかい	8	22.9%	22	62.9%	24	68.6%	10	28.6%	3	8.6%	3	8.6%	** 0.0021
強い	5	14.3%	14	40.0%	19	54.3%	17	48.6%	11	31.4%	4	11.4%	* 0.0219

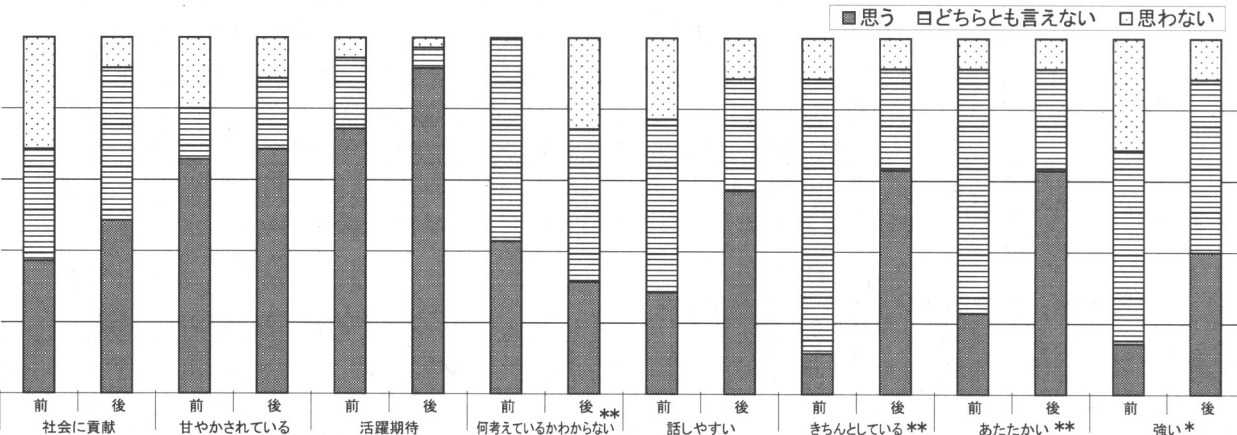


図4 若者イメージの変化（「交流事業」前後の比較） * $p \leq 0.05$ ** $p \leq 0.01$

項目別にみると、「きちんとしている」は、「交流事業」前は「どちらとも言えない」が27名（77.1%）で最も多かったのに対し、「交流事業」後は「思う」が22名（62.9%）で最も多かった。「あたたかい」も同様に、「交流事業」前は「どちらとも言えない」が24名（68.6%）で最も多かったのに対し、「交流事業」後は「思う」が22名（62.9%）で最も多かった。一方、「何を考えているかわからない」の「交流事業」前後の変化は「思う」が15名（42.9%）から11名（31.4%）に、「どちらとも言えない」が20名（57.1%）から15名（42.9%）に減少し、「思

わない」が0から9名（25.7%）に増加していた。また「強い」では、「思わない」が11名（31.4%）から4名（11.4%）に、「どちらとも言えない」が19名（54.3%）から17名（48.6%）に減少し、「思う」が5名（14.3%）から14名（40.0%）に増加した。

イメージの変化を男女別にみると、男性では交流の前後で各項目に大きな差がなかったのに対し、女性では「きちんとしている（ $p=0.00002$ ）」、「あたたかい（ $p=0.0011$ ）」、「何を考えているかわからない（ $p=0.0067$ ）」、「強い（ $p=0.0151$ ）」、「話しやすい（ $p=0.0349$ ）」

の5項目で有意な差がみられた。女性だけに有意差のあった「話やすい」では、「思わない」が6名(24.0%)から2名(8.0%)に、「どちらとも言えない」が11名(44.0%)から6名(24.0%)に減少し、「思う」が8名(32.0%)から17名(68.0%)に増加した(表4)。

表4:地域リーダー高齢者の若者イメージの変化(「交流事業」前後の比較-男女差) (n=35)

項目	性別	思う		どちらとも言えない		思わない		有意確率	
		前	後	前	後	前	後	*p ≤ 0.05	**p ≤ 0.01
社会に貢献している	男性	3	30.0%	4	40.0%	4	40.0%	5	50.0%
	女性	10	40.0%	13	52.0%	7	28.0%	10	40.0%
親や周囲に甘やかされている	男性	9	90.0%	7	70.0%	0	0.0%	1	10.0%
	女性	14	56.0%	17	68.0%	5	20.0%	6	24.0%
これからの活躍が期待できる	男性	7	70.0%	8	80.0%	2	20.0%	1	10.0%
	女性	19	76.0%	24	96.0%	5	20.0%	1	4.0%
何を考えているかわからない	男性	5	50.0%	6	60.0%	5	50.0%	3	30.0%
	女性	10	40.0%	5	20.0%	15	60.0%	12	48.0%
話しやすい	男性	2	20.0%	3	30.0%	6	60.0%	5	50.0%
	女性	8	32.0%	17	68.0%	11	44.0%	6	24.0%
きちんとしている	男性	2	20.0%	4	40.0%	6	60.0%	4	40.0%
	女性	2	8.0%	18	72.0%	21	84.0%	6	24.0%
あたたかい	男性	3	30.0%	4	40.0%	6	60.0%	4	40.0%
	女性	5	20.0%	18	72.0%	18	72.0%	6	24.0%
強い	男性	2	20.0%	3	30.0%	7	70.0%	6	60.0%
	女性	3	12.0%	11	44.0%	12	48.0%	11	44.0%

VII 考察

若者イメージ8項目について尋ねた結果、「交流事業」前・後共に、「これからの活躍が期待できる」が最も多かった。これは、前回調査とも一致する結果であったが、今回は「交流事業」前の74.3%から「交流事業」後は91.4%と、17.1ポイント上昇している。また、「交流事業」前には「社会に貢献しているとは思わない」が「交流事業」前の31.4%から「交流事業」後は8.6%と22.8ポイント減少している。筆者らの先行研究²¹⁾で、高齢者が「交流事業」後に学生に抱く印象として、【前向きな姿勢】【真面目で真剣】【目的意識がある】【自分の考えを持っている】【看護への熱い思いがある】【未来への期待】【頼もしい】等が挙げられていた。目的意識を持って学習し社会に貢献することを志す看護学生の姿に接し、若者に対する期待をさらに大きくしたこともうかがわれる。

一方、「親や周囲に甘やかされている」は、「思う」が「交流事業」前65.7%から「交流事業」後には68.6%に上昇し、前後とも高い割合を占めていた。「親や周囲に甘やかされている」というイメージは現代社会の特徴であるとも言え、今回の交流だけで払拭できるものではない。

しかし昨年度実施した先行研究²²⁾では、「親や周囲に甘やかされている」が「交流事業」後、肯定的に変化している割合が高かった。今回は「高齢患者役」としての参加であったため、若者の生活について理解を深める時間を十分取ることが難しかったことが影響していると考えられる。交流の中に、学生が親や周囲に対して感じていることを話したり、自立して生活している学生の状況を知る機会があったりすると、高齢者の若者に対するイメージの変化が期待できる。今後「交流事業」を企画していく上での課題であると考えます。

次に、「交流事業」前・後で有意な差があった「きちんとしている」、「あたたかい」、「何を考えているのかわからない」、「強い」についてみる。「きちんとしている」と「あたたかい」は、いずれも「交流事業」前に「わからない」という回答が多かった項目である。また、「何を考えているのかわからない」は「思う」が42.9%から31.4%に11.5ポイント、「どちらとも言えない」が57.1%から42.9%に14.2ポイント減少し、「思わない」が0から25.7%に増加している。今回、前年度の研究成果を踏まえ、「高齢者が看護学生の授業に看護の対象者役として参加しながら交流する」という企画を実施

したが、看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れ、「交流事業」前の「若者の考えのわかり難さ」に対するイメージがなくなり、あたたかさや誠実さを感じることができたため、大きなイメージの変化に繋がったと推察される。

また「強い」は、「思わない」が31.4%から11.4%に20ポイント、「どちらとも言えない」が54.3%から48.6%に5.7ポイント減少し、「思う」が14.3%から40.0%に25.7ポイント増加している。先にも述べたとおり、目標に向かって学習する看護学生の芯の強さを目の当たりにし、イメージが変化したのではないかと考える。

先行研究²¹⁾では、「交流事業」終了後調査票の自由記述欄に、高齢者から「今から看護を背負っていく若者に、日本の将来を担う自信を植え付けてもらいたい」「看護師になる勉強だけでなく、人間としての成長を学ぶことが必要」等の貴重なメッセージをもらった。そこで今回は、人生の先輩として高齢者から専門職をめざす看護学生に直接アドバイスをもらう時間を設定した。学生に向けたメッセージには、地域リーダー高齢者が一生懸命学んでいる看護学生を理解しながら、期待を込めて年長者としての知恵を伝授する意識が現れており、交流の中で人生の先輩として教訓や応援を、積極的且つ自然に伝える姿があった。

本研究の対象者は平均年齢が 67.7 ± 3.3 歳と前期高齢者がほとんどであったが、「若者と話す機会はほとんどない」が40%と多かった。また「話す機会がある」と答えた人でも、話す時間は「挨拶程度」～「30分以内」で71.4%を占めており、お互いを深く理解できるような会話にはなっていないことが推察される。一方、先行研究²⁰⁾でも述べたが、医療場面では高齢者が看護の対象となる場面がますます多くなっており、高齢患者やその家族のニーズに応じた看護提供が求められている。しかし、日常の中で高齢者との接触体験が少ない看護学生にとって、高齢者の理解や高齢者との対応に困難を要する場合もある。また、身体面の老化や活動性の低下などのイメージが先行し、高齢者の持つ

ている能力に気づかないことも多く、看護基礎教育において、学生が高齢者への関心と理解を深められるような教育を実践していくことが求められる。本交流のように、地域の中で生き生きと生活している高齢者と直接交流できることは、看護学生が高齢者の理解を深める絶好の機会となる。以上のことから、本交流は世代間交流の場として、高齢者と現代の若者である看護学生、相互にとって貴重な機会であり、対象を地域在住高齢者に広げて継続的に実施することで、さらに有効な企画になると考える。

VIII 結論

先行研究成果を踏まえ、「地域リーダー高齢者が看護学生の授業に看護の対象者役として参加しながら交流する」という企画を実施し、若者イメージと看護学生に感じたことを調査した。看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れ、「交流事業」前の「若者の考えのわかり難さ」に対するイメージがなくなり、あたたかさや誠実さを感じていた。同時に目標に向かって学修する看護学生の芯の強さを目の当たりにし、交流の中で人生の先輩として教訓や応援を、積極的且つ自然に伝える姿があった。世代間交流の場として、本企画の有効性と、対象を広く地域在住高齢者に広げて継続的に実施する必要性が示唆された。

IX おわりに

今回、地域リーダー高齢者と看護学生との交流スタイルを変更し、高齢者の若者イメージが大きく変化した。しかし今回の対象者は、地域リーダー高齢者の集団であり、単発の交流であったことから、その結果には限界がある。

今後は、看護学生との交流が対象者の若者イメージに及ぼす影響や若者イメージの変化が生活に及ぼす効果について検証していくが、この結果を踏まえ、大学の周辺地域に在住している一般高齢者に対象を広げて、交流のプログラムをさらに充実させながら調査・介入を続けていきたいと考える。

謝 辞

本研究の実施にあたり、快く調査にご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

なお、本研究は平成22年度山梨県立大学地域研究交流センター共同研究費の助成を受け実施した研究の一部である。

【文献】

- 1) 草野篤子：インタージェネレーションの必要性、現代のエスプリNo.444, 至文堂, 2004.
- 2) 柴田博・長田久雄：老いのこころを知る, ぎょうせい, 2003.
- 3) 谷口幸一・佐藤眞一：エイジングの心理学 老いについての理解と支援, 北大路書房, 2009.
- 4) 山梨ことぶき勸学院, 山梨県ホームページ, <http://www.pref.yamanashi.jp/shakaikyo/38948246326.html> (2010.9.1閲覧).
- 5) 大津廣子・足立みゆき・渡邊亜紀子：前期高齢者と後期高齢者が求める看護師像の違い, 日本看護科学学会学術集会講演集Vol.27, 287, 2007.11.
- 6) 新田淳子・緒方泰子：世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観 介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義, 日本看護福祉学会誌Vol.10 No.1, 90-91, 2004.
- 7) 渡辺直紀・藤原佳典・西真理子他：都市部高齢者の世代間交流型社会貢献 プログラム"REPRINTS"(4) 児童の高齢者イメージ, 老年社会科学Vol.27 No.2, 273, 2005.
- 8) 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム "REPRINTS"の1年間の歩みと短期的効果, 日本公衆衛生雑誌Vol.53 No.9, 702-714, 2006.
- 9) 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵他：地域在宅超高齢者における廃用症候群の予防を目指した訪問型介入プログラム「自分史くらぶ」の開発予備的検討, 老年社会科学Vol.29 No.1, 75-83, 2007.
- 10) 甲斐一郎：ソーシャル・サポート授受の介入研究(世代間交流が高齢者と高校生に与える影響)(研究課題番号10670338), 平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 資料4 4-5, 2002.
- 11) 流石ゆり子・亀山直子：『健康高齢者実習』の意義—学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討—, 日本老年看護学会誌 Vol.9 No.1, 65-75, 2004.
- 12) 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ, 日本看護科学学会学術集会講演集Vol.24, 322, 2004.12.
- 13) 家里かおり・渡邊裕子・倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響, 日本看護学会論文集 老年看護Vol.35, 82-84, 2005.
- 14) 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究—老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了までの変化—, 山梨県立看護大学短期大学部紀要 Vol.11 No.1, 159, 2006.
- 15) 勝眞久美子：自律した高齢者との語り合いが看護学生にもたらす効果, 日本看護学会論文集 老年看護Vol.37, 172-174, 2007.
- 16) 藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果-高齢者に対する年齢と色のイメージ変化より-, 山梨県立大学看護学部紀要Vol.9, 35-42, 2007.
- 17) 藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果(第2報)-高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて-, 山梨県立大学看護学部紀要Vol.10, 93-101, 2008.
- 18) 仲谷明子・松岡佳子・高田由起子：患者と看護師が求める看護師像の相違, 日本看護学会抄録集 看護管理Vol.39, 351, 2008.10.
- 19) 渡邊裕子・小山尚美・流石ゆり子他：看護学生との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足度・心理・若者イメージの変化—「交流事業」参加前後の比較から—, 平成21年度山梨県立大学看護学部共同研究費助成研究成果報告書, 2010.
- 20) 渡邊裕子・小山尚美・流石ゆり子他：地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感, 山梨県立大学看護学部紀要, Vol.12, 9-18, 2010.
- 21) 萩原理恵子・中澤緑・小山尚美他：地域リーダー高齢者が若者に対して抱く印象-『看護学生との交流事業』後の調査から-, 日本看護学会抄録集 老年看護 2010, 187, 2010.9.
- 22) 小山尚美・渡邊裕子・流石ゆり子他：地域リーダー高齢者が抱く若者イメージの変化『看護学生との交流事業』前後での比較, 日本老年看護学会第15回学術集会抄録集, 234, 2010.11.

Changing Young People Image of Senior Leaders with Nursing Student Exchange Programs

WATANABE Yuko, MORITA Sachiyo, SASUGA Yuriko,
HAGIHARA Rieko, KOYAMA Takami, NAKAZAWA Midori,
MIZUGUCHI Tetsu, MORIMOTO Kiyoshi, FUKASAWA Katuhiko

key words: senior leaders, young people image, nursing student, exchange programs



University Center for Research and Exchange

山梨県立大学地域研究交流センター

〒400-0035 甲府市飯田5-11-1
TEL 055-224-5310 FAX 055-224-5330